
インフィニット・空我・ストラトス

郡司侑輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・空我・ストラatos

【Zコード】

Z0938T

【作者名】

郡司侑輝

【あらすじ】

未確認生命体四号と呼ばれた戦士・クウガの変身者響輝羅。彼は何故か、女の園IS学園へ……

この作品は声優ネタ・パクリネタ・やや原作ブレイクなど作者の観点で作成しております。

至らない点がございましたら、それは自分が至らないという事なので、そこら辺は温かく見守り下さいませ

プロローグ

「何なんだよ！ 一体！」

少年は、数人の黒服の男達に追われていた。捕まつたら死。それが少年の脳裏にちらつく。

「これじゃあ、何の為に俺はグロンギと戦つて来たんだよ！」

路地の曲がり角を曲がると同時に、誰かに建物の中に引き込まれ、同時に口も塞がつた。

「大丈夫だよ？ 安心して」

その人物が呟くと、先ほどの黒服の男達はこちらに気付くことなく通り過ぎて行つた。

「久しぶりだね。きー君

「輝羅……響輝羅ですよ、篠ノ之束さん。あつがとうござります」

少年……輝羅は自分を救つた人物……篠ノ之束に礼を言つた。

彼女はのんのんと人差し指を横に振る。途端に彼女は真面目な表情になり、輝羅を見据え言つ。

「早速だけど、I.S学園つて知つてる？」

輝羅「あの、女子高の？」

束「まあ、大体は合つてゐる。実はそこに」

「

束の発した言葉を、輝羅は一字一句逃さず聞き入れ、驚愕する。
初春の春一番が、一人を撫でる様にふいたその日は、晴れだつた。

続く

第一話 転入（前書き）

主人公設定

響 輝羅

誕生日 8月 2日

一人称 僕

未確認生命体四号と呼ばれた彼は、心のどこかで傷を負った。それでも彼は戦った。皆の笑顔を守る戦士・クウガとして戦った。特技は笑顔とハッキング。容姿と声は、SEEDのキラ・ヤマト似。専用機持ちで、ISの名はフリーダム。第四世代のISでワンオフアビリティーは不明。

第一話 転入

束さんに助けられた俺、響輝羅エクサカリは何と、女の園レディース学園に転入される事となつた。束さんが言つては、そこに一夏がいるところから、安心できる。

でも、束さんの下で俺の専用機フィットティングやらなんやらかんやらで、実際の入学より遅れてしまつた。今俺は、一年一組の前にいるのだが……。

輝羅「君も、転入生？」

シャルロット「まあ、そんなものかな？君は、男の子だよねもしかして……」

輝羅「そのもしかしては当たりだ。俺の名は響輝羅。命の響きに輝く修羅スラつて意味で名前が付けられたんだ」

シャルロット「そつか。よろしくね」

少し雑談した俺達二人は、山田麻耶先生に呼ばれ俺だけ先に教室に入つた。

麻耶「転入生の響輝羅君です。仲良くしてくださいね？」

輝羅「響です！何分馴れない事も有りますがよろしくお願ひします！趣味は読書！特技は笑顔とハッキング！」

千冬「要らん事を言つなー」

ボコ！

突然俺は呂布^{りょふ}…失敬。織斑千冬先生に出席簿で殴られた。当然だ。ハツキングは犯罪行為だ。

俺は紹介を終えると、クラスの反応を見た。うつわ、失敗した！

「モ……」

輝羅「き？」

「「「きやあああああ～～～！～」」

「男よ！男！」

「神様、ありがとう！」

「しかもイケメン！織斑君と負けず劣ら^らず！」

どうやら成功したようだ。俺の視線の端で、馴染みのある顔を見付けた。

輝羅「久しぶりだな、一夏」

一夏「ああ、久しぶり」

輝羅「どれくらいだつけ？」

一夏「一年とも経たなかつたからな。家もあそこか？」

輝羅「まあ、今の自宅は変わらずあそこだ」

一夏「とにかく、これからもよろしくな、相棒！」

輝羅「おうよ、相棒！」

そんな俺達に、数人鼻血を流している女子がいたが、敢えて俺は無視する。

麻耶「それと、後一人転入生がいます」

麻耶先生が言つと、クラスの女子がざわざわとざわめく。しかし、俺は気にしない。

扉が開くと、入つて来たのはさつきの女子だった。

麻耶「実は……デュノア君は実は……デュノアさん……といつ事でした」

突然クラスの女子が騒ぎ出す。口々に一夏とルームメイトだった。タベ一夏と大浴場使つていた。等と言つ。すると、隣のクラスからなんと俺と一夏の馴染み深い鈴」と、凰鈴音が専用機だろうか、甲龍ショウロウを装備しながら入つて来た。

鈴音「一夏あ、あんたって奴は！」

一夏「わわわ、待て、鈴！これには深い訳が…」

鈴音「問答無用！」

双天牙用……だつたけか？ 束さんの資料に載つてたそれは、一夏を切り裂こうとする。

が、その斬撃は一時停止するかの様に止まつた。止めた本人はプラチナヘアーの…確かドイツの代表候補生のラウラ・ボーデヴィイツヒが専用機シユバルツェア・レーゲンの慣性停止結界、通称、A.I.C アクチオギツアセラとやらを張り、一夏を守つた。

一夏一 わふわゑ、リカ... むぐりー「

突如一夏の唇をラウラが奪う。うつわー、一夏終わつたな。
イギリスの代表候補生のセシリ亞・オルコット、俺と一夏の幼馴染
みの篠ノ之箇、さらに先ほどの…シャルロットも一夏を集中的にボ
ロつた。

輝羅—生きていか夏?—

一夏「多分」

休み時間。俺は席の隣の一夏の生存報告を聞き取り、読みかけのラ
イトノベルを再び読む。

輝羅「しかし、寒い時代だな」

一夏「何がだ?」

輝羅「ISの登場で世界のパワー・バランスが崩れた。尤も、俺は男

尊女卑だらうが女尊男卑だらうが関係ない。皆笑顔で暮らしてくれれば、俺はそれでいい」

一夏「笑顔……か」

セシリア「響さん、少しよろしくて?」

輝羅「君……は?」

俺はわざと知らないフリをして答える。データ上でしか彼女を知らないが、彼女は確かに専用機持ちだそうだ。

セシリア「イギリス代表のセシリア・オルコットと申しますわ。以後御見知りあきを」

輝羅「こちひじか、響輝羅です。いつも一夏がお世話になつています」

一夏「輝羅、おまえは俺の親か親戚か!」

一夏の言い分を流すと、セシリアは俺に問い合わせす。

セシリア「貴方、一夏さんと随分親しいそうですね。お知り合いでですか?」

輝羅「知り合いも何も、幼稚園時代からの幼馴染みだよ。篠も鈴も俺の事知ってるだらう」

セシリア「そうですか。所で、専用機は?」

輝羅「次の実践授業までの秘密だ！今のところ、教えてたらつまらないだろ？」

一夏「へえ、輝羅も専用機持つてんのか」

輝羅「まあな（つて）いうか、束さんから貰つて、（じ）（じ）へ束さん名義で転入したんだよな…」

すると、チャイムがなると同時に放送が入る。織斑先生の声だ。

千冬「一年生全員に連絡次の授業は急遽専用機持つの「一ポレーシヨンマッチ」とする。全員着替え、第二アリーナに10分以内に集合！尚、遅れたものはグランド十周！」

一夏「やばつ、急ぐぞ輝羅！遅れたら一周一キロの十周だ」

輝羅「げ！それだけは避けたい！」

アリーナの更衣室は、俺と一夏以外は誰もいない。当然だ。世界ひろしといえど、世界でISL使える男は俺と一夏しかいないからだ。数分も数秒もしない内に着替えを済ませた俺達は一足先に、織斑先生の立つている第二アリーナのグランドに到着した。

輝羅「響輝羅、ただいま到着致しました！！」

千冬「（じ）（じ）は軍隊じゃないぞ」

織斑先生に軽く突っ込まれると、後方から同じ一年の連中が来る。中には幕、セシリ亞、鈴、シャルロット、ラウラの姿が見えた。つていうか、鈴つて二組なんだな。

千冬「よし、集まつたな。今日は、抜き打ちの専用機持ちのコーポレーションンマッチだ。響、専用機を持っているな」

輝羅「はい」

右手にある青い腕輪。それが俺の専用機・フリーダム。俺以外に知っているのは、作ってくれた束さんと、今ここにいる織斑先生だ。しかも、俺の転入手続きの相手も何を隠そうこの織斑先生だ。

早速俺は右手を高く挙げ、叫ぶ。

輝羅「輝け、フリーダム！！」

腕輪が粒子変換され、俺の身を包む。神々しい光が止むと、白い装甲、十枚の青い翼、両腰のレール砲、左手には少し大きめの盾、右手にはビームライフルがグリップされている。

輝羅「ふうううう……」

フリーダムを纏つた俺はいつの間にか、甲龍とブルーティアーズを展開した鈴音とセシリ亞がいた。

鈴音「あんたなんか、一分も経たない内にやつつけてやるんだから

！」

セシリ亞「今のうちに降参なさったほうがよくて？」

かつちーん。手加減してやるつかと思つてたが、叩き潰す。

輝羅「おつけ」

千冬「では、始め！」

織斑先生の命図と共に、フリーダム、甲龍、ブルーティアーズが宙を舞う。

俺の期待目掛け、ブルーティアーズのスター・ライトMark?の火が吹く。俺はシールドを掲げ、突つ込む。

セシリ亞「な、なんて無茶な！」

輝羅「俺の辞書に、無茶って言葉は生憎記載されていないんでな！」

近付いた所で、フリーダムのレール砲が実弾を吹き確実にシールドエネルギーを削ぐ。

鈴音「私を忘れるなあああ！」

おつと、素で忘れてた。とにかく、俺はあいつの性格を熟知している。

近付く甲龍を蹴り飛ばし、ブルーティアーズから放れバラエーナで双方を狙い撃つ。

セシリ亞「に、逃げ道が！」

鈴音「ここしか！」

セシリ亞 & 鈴音 くわざわつー・くわ

ビンゴー予想通りにつん」…

輝羅「さてと。神に祈つたか？次に笑顔になつた時がお前の幸せつてな！」

五つの砲門から火が吹く。これが、俺の、フリーダムの必殺技！ハイマツトフルバースト！

迫る火線が甲龍とブルーティアーズの武装等を撃ち、シールドエネルギーを削る。ビームライフルを腰にマウントし、ビームサーベルを握り接近。残りのシールドエネルギーを零にした。つてか、ここ空中じやん！？やつべ、やり過ぎた！

飛行能力を失つた二機は、意識ある一人と共に真つ逆さま。俺はブーストを吹かし、一機に急接近。腕を取り、ゆっくりと下ろす。織斑先生から出席簿アタックを喰らひ。

輝羅「セシリ亞、鈴、スマン！やり過ぎた！」

セシリ亞「い、いえ。挑発した私達がいけないんですわ

鈴音「つていうか、何でそんなに強いの？つてかそれ第何世代？」

鈴が俺にそう質問してきた。そういうえば東さん言つてたな。取り敢えず言つとくか。

輝羅「東さんが言つには、第四世代だなんとか

鈴音「だつ…」

セシリ亞「第四…？…」

「「「第四世代！…！…？」」

一夏「輝羅、それって…」

輝羅「どうした？」

全員は啞然とした表情で俺を見る。勿論束さんの実の妹の笄でさえも。

輝羅「正直俺も分からん。束さんは『フリーダムは第四世代のI.Sだよお！束さんてちょー天才！』って

俺はそう真実を述べた。しかし、半信半疑の奴も数名いる。

次は、一夏&シャルロット対ラウラだ。これに関しては、笄と鈴とセシリ亞の他にその他の女子が羨ましげに一人を見ていた。実践となると、A.I.Cの凄さがハンパない。

学校が終わり、俺は寮の自分の部屋にいた。それは一夏と相部屋だった。荷物という荷物は、織斑先生が俺の家から持つて来たケータイの充電器と着替え位だ。

一夏「俺の時と同じだな」

輝羅「無いよリマシだろ？そろそろ飯食つか

一夏「ああそだな。」この食堂の飯は美味いぞ！」

と、連れられて来たのはその一夏の言つ食堂。そこには、俺を祝つかの様に横断幕で『よしそー！』と書かれていた。席に誘われ（一夏は言わずもがな）俺は腰を降ろす。

薰子「ではでは！転入生でありながら、一人目のEHSを扱う男子、響輝羅君にインタビューです。あ、私は一年の薰子ね。新聞部に所属しています」

輝羅「ビ…ビ…」

勢いあるね、この先輩は。EHSレコーダーを出した薰子は早速俺にインタビューする。

薰子「まず始めに、お名前と誕生日をお願いします」

輝羅「えっと、響輝羅です。命の響きに輝く修羅で響輝羅です。誕生日は、8月2日」

薰子「カッコイイ名前ね。ついでに趣味と特技も教えてね」

輝羅「趣味は読書です。特に推理小説とライトノベルを愛読しています。特技は笑顔とハッキング」

また失敗するかなあ……。

薰子「ではその得意な笑顔をお願いできるかしりっ！」

輝羅「笑顔……ですか？」

取り敢えず、精一杯の笑顔をした。

カメラのシャッターを切る薫子先輩を筆頭にその他の女子（雛達は別）が詰め寄る。

今になつて、俺は思った。束さんは、あいつらと戦つた俺の心の傷を癒す為に、こんなことしてくれたんだな。

続く

第一話 転入（後書き）

次回

臨海学校を数日に控えたその日、あいつらが復活した。

ゲゲルの魔の手が、クラスの皆を襲う。

そして輝羅は空我の力を解き放つ。

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【復活】

第一話 復活

臨海学校を数日控えた今日は、清々しい朝を迎えた。俺は一夏よりも早く起き、顔を洗う。

輝羅「ああ。朝日が心地好い」

じじくへきこ台詞を言つた1時間後、一夏も目を覚まし食堂に行く。途中、俺を五度も押し退け篠、鈴、セシリア、シャルロッテ、ラウラが一夏の近くを取る。

あたた…。何も五度も押し退けなくとも…。

食堂に着いた俺は、ここに来てからの唯一の楽しみの焼鮭定食を注文する。昼はコーヒーが付いたから揚げ定食。夜は夜でカレーライス。ああ、飯が美味しいと幸せだ。

鈴音「あ、またテレビで出でる」

鈴がテレビの画面を見てそういった。画面には有名アイドル園田魅緒だ。碧色のロングヘアがチャームポイントで、絶賛人気中。ついでいいのか…

筈「確かによく出でてるな」

一夏「このもバカ売れ。ドリマやこにも引っ張り廻

輝羅「最近じやあ映画の主演にも」

鈴音「デビューしてまだ一年も満たないのにー」

纂、一夏、俺、鈴の順番で魅緒を事をペラペラ喋つてゐる、セシリアとシャルロットが訪ねてきた。

セシリア「と、何故存知なのでしょうか？」

シャルロット「やうだよ。もしかして、一夏つて……」

俺は味噌汁を飲み干し、セシリアとシャルロットに言つた。

輝羅「しつてるも何も、俺と一夏と纂と鈴の幼馴染みだよ。」
「馳走様でした」

セシリア& amy・シャルロット「『えええーーー』」

リウラ「それはなんだ？」「のか？」

セシリア「スゴイも何も、アイドルと幼馴染みつて言つのは……」

シャルロット「リウラでこう、織斑先生と昔から知り合つて二つて事だよー」

リウラ「きよつ、教室とー？」

輝羅「まあ、そんなもんだ。つかそろそろ食い終えろよ、時間大丈夫か？お先」

時間は授業開始まであと一〇分。俺は完食したはいいが、一夏達は半分も食べてない。

俺に指摘され初めて気が付いたのか、慌てて食べる一夏達は、ちょつと滑稽なもんだ。

時が進んで三時間目。

俺達のクラスは筆記授業で現在、現代文を学習中。この学校は、授業の殆どがE.S.に関する授業でその他は数少ないと言つても過言では無い。

漢字は昔から強い方だ。日課の読書の賜物だなこれは。

「さやああああ！」

突然、校庭の方から叫び声があがる。山田先生が校庭を覗くと、また山田先生も悲鳴をあげる。

麻耶「ひいっ……み、……み……」

続けて織斑先生も校庭を覗く。

千冬「つ！未確認……、未確認生命体が何故！」

輝羅「み、未確認生命体！？」

千冬「山田先生、すぐに生徒を校舎内に。それと打鉄部隊を！」

麻耶「は、はい！」

輝羅「……無理ですよ」

そういうつた俺に織斑先生は質問する。

千冬「どうことじだ？ 説明しろ響」

輝羅「あの未確認は一号です。奴の吐く糸で拘束されたらあとは、シールドエネルギーを削られ、殺されるがオチです」

千冬「ほう。それは、専用機持ちとしての意見か？」

織斑先生の言つた事は半分合つていた。

俺は窓際まで歩き、窓を開ける。地上3階ともなれば、高いといつものは高い。その窓の縁に脚を掛け、皆に言つた。

輝羅「皆の笑顔を護るための発言ですから」

言つた俺は勢いよく窓から飛び降り、空中で体勢を整え、地面に着地する。すると未確認生命体一号ことズ・グムン・バは俺に気が付いた。

ズ・グムン・バ「リントめ……ゲゲルの邪魔をするのか……」

輝羅「へえ。喋るようになれたんだな」

ズ・グムン・バ「ゲゲルの邪魔をするのかと聞いていい。答えるー」

輝羅「ああ。答えるよ」

俺は腰に両手を包む様に当てる。すると腰からベルトが浮き出る。

ズ・グムン・バ「それは、クウガのベルト……」

次に俺は、左腕を引き右手の指を軽く曲げ左から右に流し、叫ぶ。

輝羅「変身！」

両手でベルトのスイッチを押し、両手を下に広げるよう下げる。ベルトを中心に、俺の体をリントの戦士、クウガ・マイティフォームに変える。

クウガM「答へは、ゲゲルをぶつ瀆す！！」

ファイティングポーズをとつた俺は迫るグムンを受け流す。前は白いクウガだったから逃したけど、今回はそろはいかねえ。

クウガM「ぜあつ！」

げしつ！

ズ・グムン・バ「がはつ！」

クウガM「もう一つちょー！」

ぼかつ！

ズ・グムン・バ「つは！」

俺の放つ蹴りと殴りが、グムンに当たる。よろめき、後ずさるグムンに向かい、俺は走り出す。そして、その手前で飛び空中で一回転し右足を伸ばす。

クウガM「うおりやああああああああーー！」

必殺技・マイティキックがグムンの腹部に直撃。受けた部分には必殺技を受けた拍子に表れるクウガの封印のマークが浮かぶ。それを中心に、バツクルまでヒビが入り、到達しグムンは爆発する。

またこの力を出してしまった。しかし、このまま変身を解こうにも、生徒の皆様方に俺の正体がばれるな。尤も、一夏達の事だ。俺のもう一つの姿なんぞ間違つても誰にも言わないだろう。鈴を残して、人目につかない場所にたどり着き、俺は変身を解いた。

一夏「輝羅、…お前…」

振り返るとそこに、一夏を筆頭に鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、山田先生、そして織斑先生がいた。

第「どういうことだ。説明しろ!」

輝羅「説明もなにも、俺のもう一つの姿は、四号なんだよ

一夏「じゃあ、突然引越したのも…」

輝羅「そ、この力を手にしたら、一夏達が襲われるって感じでな。それでだ」

言い終えると同時に、俺の胸倉をラウラが突然引っ捕らえる。

ラウラ「貴様、何故私の嫁に隠し事など!」

輝羅「言つたら何とかなつたか?俺は……俺は……。分かるのか、おまえらに……自分自身が人間じゃ無い何かに変わつてしまつ恐怖が

!」

それは事実だ。俺は古代のベルト・アーフルを腰に巻いて、数々のグロンギと戦った。その中で俺は心に傷を負った。

輝羅「わからねえだろうな。度々見るレントゲンに写る腰のアーフルに繋がった神経、通常の人間より早い治癒力……」

千冬「お前は何だ？」

輝羅「え……」

突然言つた織斑先生のその言葉が分からなかつた。
俺が何だつて？

輝羅「俺は……」

千冬「四号か？ 怪物か？ ヒーローか？ 違うだろうな」

一夏「……輝羅」

竇「輝羅！」

鈴音「輝羅」

セシリア「響さん」

シャルロット「輝羅！」

ラウラ「響！」

一夏達は俺の名を言つた。俺の名は響輝羅。命の響きに輝く修羅と

親父がそう言つて意味で俺に名付けた。

輝羅「……俺の名は響輝羅。それ以上でもそれ以下でも無い。そーれーに、四号じゃなくてクウガ、な?」

俺は皆を見て、自然と笑顔になつた。
ここにいる一夏を含めた八人と、東さんは四号クウガ = 俺を受け入れてくれた。

「I-1が日本でいざるかあ?」

日本とのある空港。そこには一見年端もいかぬ少女だった。
彼女はカウンターにパスポートを提示する。

「御旅行ですか?」

「いや、転校……でいざるのみ」

その少女の名はカナダの代表候補生である、メアナ・ノート。彼女は印が押されたパスポートを受け取り、ゲートを通過する。

メアナ「待つてゐでいざるよ、EIS学園」

彼女の首にあるチョーカーは、EIS【ダークネス・ファンタム】《暗黒の幻影》【の待機状態。

それが彼女の専用機なのだ。

続
<

第一話 復活（後書き）

次回

臨海

第二話 臨海

つあ～。今朝はホントに災難だつた。

何故そうなのかと言つと、朝俺が普通に起きたら、隣の一夏のベッドに一夏以外の何かの膨らみがあつた。

勿論俺は絶叫し、続けて一夏も起床&絶叫した。それにより、その膨らみの正体＝ラウラが一條纏わぬ姿で降臨。ちゃんと大事な部分は髪の毛で隠れていた。

しかも誰だよ、彼女に間違つた日本常識を教えたのは！

そこに一夏を朝食に誘おうと箸が入出。後は御想像の通り、三人には織斑先生からお叱りを受けたのだ。

俺？俺はさつさとトンズラして、こうして朝飯を頂いている。

輝羅「味噌汁が旨い。日本人でよかつたあ…」

そういうつた俺は、清々しい笑顔を青空に向ける。

と、校門の近くでこの学校の制服を着た女の子がいた。

輝羅「（転校生…なのか？迷つてゐみてえだし……行つてみるか）」

「ねえ～、びつきー。相席してもいいかなあ～」

輝羅「あり？あんた確か…野仏本音…だつけか？」

のほほん「せいかあい！」

俺をあだ名で読んだのは同じクラスの野仏本音。通称のほほん。一夏も彼女を知つてはいるが、あだ名でしか覚えていない。

輝羅「別にいいけど、俺もう食い終わったし、後はお茶飲む位だぞ」

のほほん「別にいーよお」

食後、俺は校門近くに行つた。まだあの女の子迷つてゐようつだな。取り合えず、行ってみつか。

輝羅「君、この学園の生徒?」

すると、その娘は俺を見ると微笑ましい限りの笑顔で俺に問い合わせる。

メアナ「不躾な質問で御無礼かも知れぬが、転入手続きは何処でござるか?」

輝羅「……転校生……かい? つていうか今時珍しい侍言葉だね」

メアナ「手前はメアナ・ノート、カナダ生まれのカナダ育ち。今月15になつたばかり、諸々の事情で飛び級で転入いたし候。^{やくひき}趣味は日本刀集めにござる」

と、飛び級つてありなのか! ? あつ、でもカナダやアメリカだつたら当たり前か。しかし日本刀集めか、籌といい勝負だな。

輝羅「じゃあ案内するよ」

メアナ「本当にござるか? !」

また微笑ましい笑顔を俺に向けるメアナ。クウガとして戦つた褒美というのか、笑顔というものは何物も変え難い。俺の守つた笑顔の

中に、この子の笑顔も入っていたんだな。

そして、待ちに待つた臨海学校の日。バスの中はまるで修学旅行に行くかの様だ。その騒がしい中、一夏はセシリ亞と何かを話しているが、俺は関係ない。

メアナは三組に編入し、休み時間になればたまに俺に会いに来る。俺を兄と呼んだり、筹を姉と呼んで親しんでいる。筹も筹で、趣味が共通しているせいか仲もいい。まるで本当の姉妹みたいだ。

まだ海は見えない。俺は読みかけの推理小説を読んでいるところだ。しかし、あとちょっとで犯人が分かるつてのに、すぐ着きやがった。旅館に着くと女将さんへの挨拶。これをしとかないと人間としてはどうかと思うよな、うん。

女将「おやまあ。今年は男の子もいるんでしたつけ

千冬「出来損ないの弟とおまけですから」

おまけって……。

それから俺達は宿泊する部屋へ歩く。宿泊する部屋は大事なのだが……。

千冬「一夏と輝羅、お前達は私と相部屋だ」

一夏「千冬姉と?!」

輝羅「淫行防止ってやつですか」

千冬「まあ、そんなもんだ

因みに、織斑先生はプライベートな時だけ俺と一夏を名前で呼ぶ。そして今俺がいる場所はその相部屋だ。六畳位の和室でトイレ付き、窓を開ければ木々と海が見える。

それと、今日一日は自由行動だ。海に行くことは許可されではいるが、生憎そこに更衣室は無いため、この旅館で水着に着替えて海へ直行する。

その更衣室へ向かう途中、俺と一夏は顔を真っ赤にする。

「あ、また胸大きくなつた？！」

「！」のあと揉んでやれえ！――

とまあ、こんな感じでビーチの思春期の塊だつたら裸に耳立てて聴き入るが、俺と一夏はそんな事をしない。

男子用の更衣室で着替えた俺達は海へ行くのだった。

麻耶「いいですか？！夕飯の時間まで自由行動ですからねえ！」

「――はあ～い！」

海に着いたら着いたではしゃぐ俺達に、山田先生はやついた。

のほほん「ねえねえおりむー、ビーチバレーしようよ～！びつきーもおー！」

一夏「ああ、いいぜー！」

輝羅「俺も俺も」

その時だ。鈴が一夏の肩に乗り出し、メアナも俺の肩に乗る。

鈴音「いやあ、高い高いー！」

メアナ「高いでござるー！」

一夏「鈴ー！お前は猫か！」

輝羅「俺猫好きだけど、いきなり乗っかるなー！」

勿論、鈴も俺の肩に乗つかつてるメアナも一夏と俺の話を聞かなかつた。

軽い咳ばらいが後ろから聞こえたかと思えば、シートとパラソルを装備したセシリ亞がいた。その目は苛立つているのがよく分かる。そういえば、一夏はセシリ亞となんか話してたけど、何かあつたのか？

セシリ亞「凰さんー！一夏さんに何をー！」

鈴音「決まってるじゃない！移動監視塔！」

セシリ亞「一夏さん！バスの中で私の約束を忘れましたのー！」

約束？あー、あれか。

するとセシリ亞はいつの間にかシートを敷きパラソルを開いて浜に刺し、シートに伏せ水着の紐を解き一夏を見て言つた。

セシリア「ああ、一夏さん。お願ひしますわ」

鈴音「あんたこそ! — 夏に何せんのよ!」

鈴は一夏から降りるとセシリアに向かって言い放つ。メアナも俺から降りて、俺も言つ。

輝羅……サンオイル買う金があるんだつたら、募金か何かに……」

セシリア - ?

輝羅一也「ほりえにすんなうん」

一夏はオイルの蓋を開け、手に取りセシリアの背に塗りはじめる。まだ冷たかったのか、セシリアは軽く悲鳴をあげる。

輝羅一夏、俺先にビーチバレーやつて待つてつから」

一夏「ああ、了解」

その後、セシリアの甲高い悲鳴ののち一夏の悲鳴が上がつたのは、
親友として忘れておこつ。後々あいつに変態のレッテルが張られて
しまつては鈴はともかく簫が離れてしまつ。

日が傾き始め、当たりを朱く染める。篝は一人水着姿で崖の上でそ

れを眺めていた。そんな彼女の背後を水着姿の千冬が現れる。

千冬「こんな所にいたのか？」

篠「ええ、まあ。実は夕べ……」

千冬「東から専用機を送ると聞いた。真偽を聞きたい」

篠「……本当です」

篠は沈む夕日に向かい、その篠の専用機となるH-1の機体名を呟いた。

篠「……紅椿あかづばき」

続く

メアナ・ノート

年齢15歳

IS学園に転入してきた飛び級生。日本が大好き故に侍口調。カナダ生まれのカナダ育ち。

輝羅を兄と呼び、筈を姉と呼び親しんでいる。趣味が日本刀集め。

専用機 【ダークネス・ファンタムモード】

ワンオフアビリティー【ファンタムモード】
この能力で一時的に姿を消すという荒業が出来る。

ウェポン

1・ダークネス・サイズ 自分の背丈ほどの巨大な鎌を常時装備。刃の部分の一部がソードビット（別名ファング）として飛び、反対側の残った刃が斧となり攻撃が可能。

2・超振動剣「ソニック・ショート・ブレイド」

別名ソニックブレイドと呼ばれる小型の振動剣。普段は滅多に使用しないが、主に緊急用に使用する。

3・掌部ビーム砲

この機体唯一の射撃武器。零距離で撃つもよし、離れて撃つもよしの万能武器。

第四話 紅椿

夕食の時間。俺達は旅館で出された料理を頬張る。

輝羅「美味しいな、この魚」

一夏「ああ。山葵もいい具合に美味しい」

するとシャルロットが一夏の真似をしてか、山葵の山をいきなり…
…つておい！そのまんまかぶつて…。」

シャルロット「～～～～つ…！」

まあ、そうなるだろうな。

元々山葵は刺身にチヨンと乗せ、醤油を付けて食べるってのが筋つて言つし。山葵に関しては好き嫌いが激しい人はいるだろうな。

一夏「大丈夫か、シャル！」

シャルロット「大丈夫。風味があつて美味しいよう…」

まあ、本人が大丈夫って言つし。ま、大丈夫だろうな。

お次はセシリ亞か。足をモゾモゾしているからには、さぞ正座はきつかるう。

一夏「セシリ亞、正座がダメなら椅子席行つたりビツだ？」

輝羅「無理いわねー方がいいぜ」

セシリ亞「一夏さん響さん、心配は御無用ですわ。…………それにここに座るのにどれだけ苦労したことか……」

一夏「ん？」

セシリ亞「な、何でもありませんわ」

それでもやはりセシリ亞は足の痺れに負けている。それに比べて、筈とメアナは姿勢が言い方だ。他の女子よりもいい。

一夏「やつぱり無理すんなよ。俺が食べさせてやるから

セシリ亞「え、いいんですの？」

そんなセシリ亞を口火に、やれ羨ましいだのやれ私もやつてと騒ぎまくる女子。それが俺にもかかって来る。

「ね、響君お願い！あーんして？！」

輝羅「無茶言つなよ……」

メアナ「お兄ちゃん、それってどうこいつの意味で『やれ』のか？」

輝羅「詳しく知らない方がいい。それに俺、フリーじゃねーぞ」

最後の方をボソッと俺は宴会場に向かう様に響く力強い足跡と気配を感じた。勢いよく襖が開けられ、信長……失敬織斑先生がスース姿で現れる。

千冬「旅館で何を騒いでおるか、馬鹿者か！織斑、大方原因はお前

だらう。不用意なアクションは控えておけ

一夏「は、……はい……」

その後織斑先生が去ると、一夏はセシリ亞に耳打ちする。やうこえ
ば、一夏つてアレ（・・）が得意だつたつけ。

夕食後、セシリ亞とのほほんを含む四角の部屋のすきやぶ台^{トレイ}ボード
ゲームやトランプ等がおかれていた。

「あ～あ。織斑君と響君が織斑先生と同じ部屋だなんて……

「やうわねえ……」

その近くでセシリ亞は浴衣の紐を解き身嗜みを整えていた。

セシリ亞「（ふふふ。一夏たら……）んな時の為に勝負下着を着けて
きて正解でしたわ」

そんな彼女の後ろで、のほほんが体育座りでセシリ亞を見ていた。
勿論浴衣の中も。

のほほん「うわーーせつしえつちいと着着けてるうーーー」

セシリ亞「あ、ー」

「なにいー？身ぐるみ剥いでやれえーーー」

セシリ亞「いやああああーー！」

のほほん等二人の攻撃から逃げ延びたセシリ亞はやっと一夏の泊まつて いる部屋までたどり着く。

その部屋の前の襖に、篠、鈴音、シャルロット、ラウラの四人が耳を立て部屋の中の様子を聞き入っていた。鈴音に促されセシリ亞も行つと、一夏と千冬の声が聴こえて来る。

「最近溜まつてゐみたいだな」

「あぐー！馬鹿者、力を入れすぎだ」

「あ、ああ。じゅあーのべりー……」

「ん、ちゅうどいー」

一体何がどうなつてゐるのか分からぬ五人は更に更に神経を集中する。しかし、冷静に考えて見れば聴こえて来るのは一夏と千冬の声。輝羅の声が一つも聴こえて来ない。

輝羅「なにやつてんだお前ら？」

ああ、月が美しい。なんて思ったのもつかの間。部屋に戻らうとして

たら、筹達が襖に耳を立てている。

部屋には織斑先生と一夏しかいねえし……。どれ、ちょっと脅かすか。

俺は五人の背後にしゃがみ込み言つた。

輝羅「なにやつてんだお前ら?」

筹「！！」

驚く筹を筆頭に鈴、シャルロット、セシリ亞、ラウラも驚きトドメとばかりに襖が開き織斑先生が現れる。

千冬「盗み聞きするほど馬鹿になつたか?」

筹「それは……」

一夏「千冬姉、セシリ亞は俺が呼んだんだ。足痺れてたみたいだつたから」

千冬「一夏が呼んだのなら仕方ない。入れ」

俺に続き筹達も入室する。セシリ亞は一夏の近くに座り、一夏はセシリ亞の俯せるように促した。

一夏「足痺れてたろ?ちょっと痛いけど我慢してくれよ」

言うと、親指に力を入れセシリ亞の腰をピンポイントに押す。余程きつかったのだろう、軽く喘いだ。

一夏は昔から指圧は上手かつた。下手したら、それで食つて行ける位だ。

すると、織斑先生がセシリ亞の浴衣の裾を上に広げた。一夏は即座に視線をそらし、俺は読みかけの推理小説に目を走らせる。つて、織斑先生！何してんですかアンタは…！

千冬「ふむ、黒か。教師の前で淫行を期待するなよ十五歳」

セシリ亞「ひーん（泣）」

数分経ち、織斑先生は一夏を部屋から出すと、冷蔵庫からオレンジジュースの缶を五つ取り出し筹達に渡し、自分は缶ビールを取り出しがるタブを開け一口飲んだ。俺は部屋にあるお茶だけで十分だ。

千冬「で、一夏の何処に惚れた？あいつはいいぞ。炊事洗濯は当たり前。疲れたら指圧のサービス。至れり尽くせりだな結婚した相手は」

籌 & a mp ; 鈴音 & a mp ; セシリ亞 & a mp ; シャルロット & a mp ; ラウラ 「「「「くれるんですか！？」」」」

五人はキラキラと目を輝かせ織斑先生に言つた。そんな織斑先生はビールをまた一口飲み、言つた。

千冬「やらん」

籌 & a mp ; 鈴音 & a mp ; セシリ亞 & a mp ; シャルロット & a mp ; ラウラ 「「「「えー……」」」」

そら簡単に自分の身内の人間をやる人間はまずいない。ありきたりなドラマによくある「娘はお前にやらん…帰れ…」みたいなもんだ。

推理小説を読み終え、俺はまた別の小説に手をかける。まさか犯人があいつだったとは。

輝羅「……。でもなんでグロンギが復活を……」

ボソリと俺は呟いて、押し入れを開き、入る。そこを鈴が見掛け、俺に喋りかける。

鈴音「何処で寝るつもり?」

輝羅「押し入れ」

鈴音「なんですよ」

第「部屋の敷地面積を考える」

鈴音「ああ」

そう、この部屋の面積は布団二つ分しか敷けない。故に三人目の俺は押し入れに入り、どこぞの猫型ロボットと同じ様に寝る。

輝羅「じゃ、お休み」

布団を被つた俺は押し入れの戸を閉め、眠りについたのだった。

次の日の朝。一夏は目の前にある非現実的な地面に生えている何かを見ている。それは機械で出来たウサ耳だ。しかも直角に曲がって

いる。

一夏「暁、おはよう」

暁「ああ、おはよう」

一夏「これに心当たりあるか?」

合流した暁に尋ねる一夏だが、彼女はそれを見た途端急に不機嫌になりその場を去った。

擦れ違いにセシリアが現れる。彼女も機械で出来たウサ耳が気になつていて。機械は地面に埋め込まれていないのが常識。それとなく一夏はウサ耳を引っこ抜く。同時に上空から人参の形をしたミサイルが落ち、一夏の目の前に突き刺さる。

中から出たのは人参から生まれた人参太郎ではなく、服のテーマが【一人不思議の国のアリス】な……。

束「ヤツホーいつ君!お久しぶりぶり~」

篠ノ之束だった。

朝食後、俺を含む専用機持ちは特別メニューを行うと聞いた。集まつたのは、俺を含め一夏、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、メアナ。それと意外な事に暁までもいた。俺達はそれぞれISステッツに身を包んでいる。専用機持ちはそれぞれ別々のメーカーで別々のカラーバリエーションのISステッツを着る。俺のは一夏と同じメーカーで同じタイプの黒と白の一色カラーのステッツだ。

話を戻すが、何故籌かいるのだろうか。あいつはまだ専用機を持つていない。何故？

千冬「よし。専用機持ちは全員揃つたな」

鈴音一先生、
箒は専用機持つてないでしょうに」

千冬「それはいざれ分かる事だ」

織班先生が言うと、彼方から土煙が舞い、徐々にこちらに向かって来る。あゝ、あれが大体誰か予想つくな。

束「ちいいいいいいいいいいりやあああああああああああん!!」

織斑先生に飛び掛からうとした束さんは、ガシツと顔を織斑先生に摘まれ大人しくなる。：ハズもいか。

束「ぐぬぬ～～！相変わらずのアイアンクロードねえ～～！」

メアナ「お兄ちゃん、あの女人怖いでござるう……」

輝羅「あ、はいはい、怖く無いからな、な?っていうか何で東さん
がここに?」

「そう俺が呟くと、今度は篠がいない。束さんがここにいるのに、そう簡単に遠くへは逃げられまい。どう彼女が足掻いてとも束さんからはある意味逃れられない。」

あるもんねー」「

ホントにめでたいなこの人は。

某龍の球に出そうな手持ちのレーダーを頼りに一つの岩の影に走る。
そして獲物（筈）を見付けた様だ。筈よ、哀れ。

筈「うあ…！」

束「筈ちゃん！お久しぶりぶり～～」

筈「お、お久しぶりです……」

束「いやあ。大きくなつたねえ！」

6年も久しぶりじやそりや大きくなるな普通は。小学校の四年から、
筈達家族はバラバラだつたからな。兄弟姉妹の再会つて、何物にも
変えられないつていうし。

束「特にオッパイが…」

ばしいん！

おーい筈い、何処から竹刀取り出したー？

筈「殴りますよー！」

束「ひどーい！殴つてから言つたあ…！」

輝羅「そりやセクハラされりや誰だつてやられまますよー」

束「オー！ いつくんモーくんおひなー！」

千冬「東、そろそろ自己紹介しろ」

束「ええええ、めんどくさいなあ」

いや、それ人間にかかせない礼儀みたいなもんでしょよ束さん。

適当過ぎるでしょ？

鈴音「束つて…」

シャルロット「ISの開発者にして、天才科学者の…」

ラウラ「篠ノ之束」

メディアー初めて会ったでござるう

束 うつふつふつ

あ〜、こりやヤバいぞ。たいていあの人が目を光らせて含み笑いす
んなんて、何か隠しているしかねーな。

束「さあ、大空を」らんあれ！」

束さんが上を指差すと、何やら降つてくる。モノリス……どうかそんな物体が重力に引かれおちてくる。

やがて、地上に落ちたそれは、IS約一機分の大きさがあった。

束「じゃじゃーん！」れど篝ちゃん専用機こと【紅椿】あかづばき！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製だよお…」

その間に、いつの間にかモノリスは開きややプリティな光が弾け、紅い鎧が、ISがそこにあった。

束「何たつて紅椿は天才束さんが作った第四世代型ISなんだよう」

輝羅「俺のフリーダムもね。その件に関しては、感謝します」

束「さあ篝ちゃん！今からファイットティングとパーソナライズを始めよっか」

束さんが手元のリモコンを弄ると、紅椿はその装甲を開き、主を待つかの様な雰囲気を醸し出していた。

千冬「さつ、篠ノ之」

織斑先生に促された篝は紅椿に歩きだし、その身に紅椿を纏わせる。成る程、以前編入前に束さんからデータを拝見させてもらつたが、あれがこの設計図だつたとは。

束「篝ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに更新するだけだね」

そう言いながら空中に3Dキー・ボードを数個投影し、束さんは高速でキーを打ちまくる。すげーな、指先で下のキーを打つて、指の第

「間接で上のキーボードのキーを打つなんて。

鈴音「すいこ。信じられないスピードだわ…」

輝羅「天才の名は伊達じゃないつて奴だな」

メアナ「お姉ちゃんがとても綺麗でいいわ」

確かに、紅椿を纏っている筈はいつもとは違つ感じを放つていた。
しかし、俺と同じ第四世代EISだとわな。

束「じゃあ試運転と行こつか」

輝羅「……既に嫌な予感がするのはなんだ?」

束「じゃあきーくん、筈ちゃんととの模擬戦お願いねーー。」

輝羅「やつぱりね」

輝羅「どうだ調子は?」

筈「大丈夫だ」

フリーダムを展開した俺と、同じく紅椿を展開した筈は空中でオーブンチャネルで会話する。成る程、紅椿は一刀流か…。

輝羅「はああ…」

先手必勝！俺はビームサーベルを両手に逆手に握り、紅椿に、簫に接近する。

簫く甘い！>

すると、彼女の両手に刀がおさまり、鎧せり合いの状態になる。オープンチャネルを通して、束の声が聞こえて来る。

束く簫ちゃんの握ってる刀は、右のは雨月、左のが空裂ね>

クスイファイアスを簫に打ち付け、俺は一度距離をとると、簫は右の雨月を振るう。雨月からいくつものビーム刃が俺に飛び掛かる。咄嗟に左のシールドで防ぐ。が、たつた一発防げなかつた。つぐ。まずいな。

そんな一瞬の隙が、許されなかつた。

簫くはああ！>

簫は左の刀・空裂を振るい大型のビーム刃が俺に大ダメージを与えた。

元のフリーダムのシールドエネルギーが600。平均的なEISのシールドエネルギーは550程度。それが一瞬に半分以下に減つた。

輝羅「やるじやねーか」

簫くそつちこそ！>

それから、互角の戦いとなつたが、呆気なく俺の負けだった。地上に降りると、山田先生が息を切らしてこちらに走ってきた。

それは、だれもが予想だになかった事だつたのだ。

千冬「二時間前。アメリカのフロリダ沖で実験中の有人ISが突如暴走し、装着者とともに日本へ向かっている事が分かつた」

アメリカのISが実験中に暴走？！
しかも有人かよ…。

セシリ亞「はい」

セシリ亞が突然拳手する。織斑先生がそれに気付き、セシリ亞に話しがけれる。

千冬「何だ、オルコット」

セシリ亞「その機体の詳細なデータをお願いします」

千冬「口外すれば数ヶ月の監視と懲罰の処罰が下るが？」

セシリ亞「構いません」

因みに、ここは旅館の第三宴会場。そこを作戦ブースそして、数台のコンピュータ機器と空間ディスプレイ等がある。これじゃあSF映画のミーティングルームだなこりや。

そして映しだされたのは、その暴走しているISだそうだ。名は【シルバリオ・ゴスペル】か。別名銀の福音と織斑先生が付け加えて言つ。

輝羅「……スペックの殆どが化け物級って、そんなのあり?」

シャルロット「しかもスピードも通常の倍近くはあるよ」

千冬「勝算があるとすれば、一撃で大量のダメージを取れる攻撃で仕掛けるしかない」

織斑先生が言い終えると同時に、俺と篝と鈴とセシリ亞、シャルロットとラウラが一斉に一夏を見遣る。

一夏「俺!?

シャルロット「当たり前だよ」

鈴音「あんたの零落白夜があるじゃない!..」

輝羅「俺もやりたい所だが、フリーダムのスピードじや歯がたたねえ。それにまだフリーダムのワンオファビリティーは発動できてねーし」

そもそも、フリーダムのワンオファビリティーは束さんでさえもわからない…………らしい。あの人は俺でも実妹の篝でも中身がまるで分からん。

すると、天井の板が一枚落ちて、俺の頭にクリーンヒットする。

輝羅「グヴュ!」

メアナ「お兄ちゃん!? 大丈夫で? ジヤルの?」

輝羅「ああ、大丈夫。……多分」

そしてその穴から束さんが現れ織斑先生に詰め寄り、喋る。

束「やーやーー中々対策出来てない見たいだね」

千冬「言わんでいい」

束「いい作戦が私の頭になつぱりんでいいんぐー」

千冬「何?」

束「篠ちゃんの紅椿がいつくんの白式を担いで行けば〇〇だよ」

紅椿に白式を担がせる?

成る程。紅椿は俺のフリーダムよりもスピードが高い。この作戦に最適なペアだな。

セシリア「お待ちください!私のブルーティアーズの高速パッケージが本国より届いております」

千冬「だから何だ。流出変換は済んだのか?今すぐに出せるのか?起動にどれだけ時間がかかる?」

セシリア「すみません…」

セシリア、哀れ。

束「それよりもあれだよねー。まるで白騎士事件を思い出すねー」

白騎士事件。

それは当田エスが発表されて間もない頃。世界中のコンピューターがハッキングされ、日本に向け発射された。それを何処からともなく現れた謎のエス・白騎士が次々にミサイルを打ち落としてしまった。これにより、世界は嫌々エスを認めざるを得なかつた。そして、それが現代兵器が鉄屑同然になつた根源でもあつた。

束「束さんの推理が正しければ、バスト85」

輝羅「先生、はい」

千冬「うむ」

ぱしいん！

俺は織斑先生にハリセン（俺お手製）を渡し、織斑先生は束さんを思いつ切り叩く。

束「ふえーん、束さんの脳みそは真つ一いつに割れちゃつたよお」

千冬「そうかそれはよかつたな。これからは左右別々に物事が考えられるぞ」

束「ならいっかー」

輝羅「いや、よくないでしようが」

第「それでは、お願ひします」

束「オッケー」

第「（これが紅椿：）」

第は左腕に鈴のブレスレット状態に待機してある紅椿を起動し、身につける。

束さんはそれを見計らつた様に、紅椿の最終チェックを行つ。

輝羅「一夏、頑張れよ」

俺は去り際に一夏に言った。

一夏「ああ」

そして、その場に束さんと第と一夏を残し、俺達は作戦ブースに戻つた。

頼むぜ、一夏、第。

続く

第四話 紅椿（後書き）

銀の福音の暴走

紅椿のレビュー

そして、白川とフリーダムの覚醒

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【福音】

第五話 福音（前書き）

今更ながら、注意事項。

原作と一部異なりますが、それでも構わないという方はお進み下さい。そうでない方は回れ右で御戻り下さい。

一夏はIRS-1のまま、海岸に立っていた。右腕の腕輪に内蔵している時計を見る。現在午前11時と22分。そろそろ作戦開始時間だ。

後ろから篝が白いワンピーススタイルのIRS-1姿でゆっくりとこちらに歩く。静かに。

二人はコクーンと頷くと、IRSを起動する。

篝「行くぞ、紅椿！」

一夏「来い！白式！－！」

数秒としない内に、紅椿を纏つた篝と白式を纏つた一夏がそこにいた。

千冬「これより、作戦を開始する」

オープニングチャネルを通じ、篝と一夏に喋りかける織斑先生。返答する篝は僅かながらだが、浮いてる気がした。

篝「織斑先生。私は状況に応じて、一夏のサポートをすればよいしいですか？」

千冬「そうだな。だが、無理をするな。お前は紅椿での実践は皆無だ突然何かしらの問題が出ぬとは限らない」

第く分かりました。出来る範囲で支援します^_^

鈴音「ねえ、あの娘声が弾んで無い？」

輝羅「だううな

メアナ「お姉ちゃん……やつぱり専用機を持てた事に……」

シャルロット「調子に乗っている事だね」

その頃、織斑先生はプライベートチャネルで一夏に何か忠告をしているのに気が付いた。さしつめ、釘を打っているのだな。

輝羅「…………おかしい。おかしそぎるわ」

メアナ「なにがでござるか、お兄ちゃん

輝羅「こんな時にE-Sの機動試験をやるのは、問題は無い。おかしいのは、紅椿の登場と今回の福音の暴走だ」

確かに出来過ぎている。

次におかしいのは、束さんが紅椿の調整後行方をくらました。何故だ?まるで理解出来ん。

鈴音「まあ、確かに出来過ぎよね」

そんな時だ。山田先生が、突然口を開く。

麻耶「み、未確認生命体二号が、この旅館に向かってきます……！」

千冬「何つ！」

輝羅「俺、行きます」

そう俺は言つて、襖を開け廊下を走る。

俺が何故出たのか、メアナは未だに分からなかつた。

スニーカーを履き、門を出ると、そこには蝙蝠怪人ズ・ゴウマ・グがそこにいた。

最後に見たのは、究極体になつた時だ。復活したせいか、元の姿に戻つてゐる。

ズ・ゴウマ・グ「貴様とまたやり合つとはな

輝羅「お互い様つて……とこだな。変身！」

クウガに变身した俺は先制攻撃として、マイティパンチを繰り出す。それを読んでか、ゴウマは一步下がりそれを避けた。

待てよ、今はまだ日が昇つている。なのに、コウモリ怪人のゴウマは平氣で、しかも夜の時と同じ動きをしている。強化体の名残だろうかね。でも、俺は負けられねーな。

ズ・ゴウマ・グ「どうしたクウガ。一年振りの対決がこいつとは、名残惜しいものだ」

クウガM「うつせー余裕ぶつこくのもいい加減にしろよ？今、俺の親友が、必死になつて戦つてゐるんだ！だからこそ、俺も戦つ。皆の笑顔の為に！」

俺はゴウマにジャブ、アッパー切割、裏拳と繰り出し、怯んだ所

で俺は数本下がり構え、助走をつけてからのマイティキックをゴウマのベルトのバツクルに直撃させる。

クウガ「うおおりやあああ！」

ズ・ゴウマ・グ「ゴウツー！」

キックを受けたゴウマは後方に飛ばされ、立ち上がるうとするが、バツクルが完全破壊され、俺の目の前でゴウマは断末魔の叫びをあげ爆発した。

ズ・ゴウマ・グ「地獄で、…………待つていいるぞ…………クウガああ！」

ドガアア――ン――!

あの時は、アイツ（・・・）がゴウマを手に掛けた。でも今は違う。ゴウマは同じ過ちを繰り返すことなく、死んだ。

輝羅「何だつて！？一夏が……筈を庇つて？！」

シャルロッテ「うん。幸い命に別状は無かつたけど、……まだ田は覚ましていないんだ」

輝羅「それで？ 篤は？！」

ラウラ「看病……といえば聞こえが良いが……」

篠は、未だ目を覚まさない一夏を見て泣いていた。髪を結ぶためのリボンは福音との戦闘で燃えてしまった。

もし自分が強ければ…

もしあの時、密漁船がいなければ

しかし、今はそれは終わった事。悔やんでも仕方ない。

そして、悔やみきれず嗚咽を漏らすと、だれかが後ろで篠を叱った。

輝羅「何やつてんだ！悔やむ事で一夏は目を覚ますのかよ！」

俺は、引き止めようとするセシリ亞に鈴、シャルロットにラウラ、そしてメアナを払い、一夏と篠のいる和室に入った。そして言つてやつた。

輝羅「何やつてんだ！悔やむ事で一夏は目を覚ますのかよ！」

振り返る篠の背後に、布団に横たわる一夏がいた。

篠が紅椿を手に入れた事により、調子に乗った。しかもその時間帯は確か、職員打鉄舞台が空域と海域を封鎖していたにも関わらず、密漁船が出ており、それに気を取られた一人は福音の攻撃を受けた。その際一夏は篠を庇いダメージを負った。シャルロットから聞いたとき、俺は怒り心頭に発した。密漁船もそうだが、お人よし過ぎる一夏も、調子に乗りすぎた篠も、そして今何もしない自分も怒った。俺は、俺は何のためにクウガに変身したんだ。

第「私はもう、HSには乗らない。乗りたくない！」

ばちいん！

俺が動くのより速く、鈴が第に平手打ちをかます。

鈴音「HSに乗らない？馬鹿言わないでよ！私達代表候補ってのは、そんなに簡単に、軽々しくなれないのよー！」

輝羅「お前がそんな弱虫だつたとはな。正直失望したぜ。けびよ一夏の分まで俺は福音と戦つ。死に物狂いでもな」

だが、ここで一つ問題だ。今のところ、福音の居場所が分かっていない。俺はさつき、トウマとの戦闘を終えた。だから作戦、ブースには顔をだしていない。

ラウラ「福音の居場所を特定した。我が国の衛星からの映像だ」

空中ディスプレイに映し出されたのは紛れも無く福音。胎児の様に膝を抱え、バリアを開いている。

輝羅「さすが黒ウサギ隊！ドイツの衛星も伊達じゃねーな

シャルロット「第、君はどうなの？僕は行くよ」

ラウラ「私も行こつ。私の一夏の気を失わせた償いをしなければ

セシリ亞「私も負けられませんわ」

メアナ「僭越ながら私も行くで」
「あらわの

鈴音「私も行くわ。で、どうするの、篝？」

篝「私は……私は……行くぞ！」

輝羅「よししゃー」
「これより、俺が指揮を執る。作戦コード、福音の歎き！以降俺を、K…と呼べ！」

輝羅「行くぜ、福音ー！」

ラウラのファーストアタックが福音に当たると、福音はじつに気付いた。

輝羅「セシリ亞、援護頼むぜ！」

セシリ亞「了解ですわー！」

強化パッケージ【ストライクガンナー】を装備したセシリ亞がアタックする俺の援護を開始する。

福音は頭部にある翼の弾丸を掃射する。後ろががら空きだ！

輝羅「メアナ！」

メアナ「分かったわ、お兄ちゃん」

メアナのHSのワントップアビリティ【ファンтомモード】が解け、

福音の背後でダークネス・サイスを振るう。が、まるで読まれたかの様に、それは避けられた。

輝羅「行くぞ、第！」

第「つむ！」

俺のバラエーナの後に、第の空裂のビーム刃が福音に向かう。

輝羅「そんな……馬鹿な！」

俺は目の前の真実が、夢であつて欲しいとまで思った。福音は、俺達の攻撃を受け片翼を失つたものの第一移行セカンド・フェイズまで行いやがった。

ラウラ「K-指示を！」

第「いいぞ！」

セシリ亞「了解ですわ」

鈴音「分かつたわ！」

シャルロット「うん」

ラウラ「了解した！」

メアナ「うん」

そういうえば、メアナの奴エスに乗ると口調変わるんだな。
そんな事はどうでもいい！今は福音を堕す！－そして中の人も助ける。

輝羅「ビームランスを喰らえ！」

俺は一本のビームサーベルを繋げ、福音に攻める。その後からブルー・ティアーズ（ビット）が飛び、福音を狙い撃つ。しかし、それもアウト。当たらない。追撃のシャルロットとラウカもコンビネーションアタックをくりだすも、アウト。

シャルロット「行くよー！」

ラビット・スイッチ
高速切替で弾が切れたマシンガンを変え、銃撃するが福音の光弾が当たり、シャルロットはラファール・リヴァイブ・カスタムと共に海中に沈む。

鈴音「こんの一ー！」

輝羅「よせーー！」

福音が攻める鈴も海面にたたき付ける。

篝「鈴ー！」

頭に血が上ったのか、篝も福音に攻める。

輝羅達が福音との戦闘を開始したその時、一夏は夢を見ていた。辺り一面海で、流木の他に少女がいた。白い帽子に白いワンピースを着ていた。心地好い歌も歌っていた。一夏は近くの流木に腰を下ろし、その少女を見ていた。

「行かなくちゃ」

歌うのを止めた少女に一夏は問う。

一夏「行くつて、何処に？」

すると、少女は消え、日が暮れた様に辺りは赤くなる。

「力を、欲しますか？」

一夏「え…」

振り向くと、そこには中世の騎士のような甲冑を身に纏い、顔はハイザーで半分隠されて口しか見えなかつた。声を聞く限り、女であることは間違いない。

「あなたは、力を欲しますか？」

その女性の問いかに、一夏は後頭部に手をやり思つた事を口に出した。

一夏「……俺は、大切な仲間を…友達を助けたい。だから、俺は力が欲しい…！」

そう決意する一夏の後ろで白いワンピースの少女が再び現れ、優しく一夏に言った。

「だったら、行かなきゃ」

状況は最大に不利と化した。俺達はほぼ全員シールドエネルギーが危険域に達していた。こんな状態じゃあ、ハイマットフルバーストなんて、撃てるわけねーな。

輝羅「行くぞーーー！」

メアナ「ーーーお兄ちゃんーーー！」

福音が俺に掃射を仕掛け、俺は突進し過ぎたせいか避けられない。そんな俺をメアナは庇い、ダメージを負い落ちていく。

輝羅「メアナああああああーーー！」

篝「おい、気を抜くな！やられるぞーーー！」

輝羅「ああ、だけどこれ、どんなムリグーだよ！チートじゃねーか

！」

ビームライフルを構え直す俺だが、どうも福音の攻略が掴めない。シールドはボロボロで防ぐのも一回が限界だ。けど、福音に囚わてる人を助けたい！

輝羅「セシリ亞、ストライクガンナーまだイケるか！」

セシリ亞「申し訳ありませんわ、福音に…」

輝羅「ラウラ、AHCで福音を防ぐ事は出来るか！」

ラウラ「無理だよ、早過ぎて出来ない！」

く、万事休すって奴か？

考えてるだけでも、やつてられない。

しかし、俺が迷つたせいかラウラとセシリ亞が海面に激突した、第
も吹つ飛ばされた。

輝羅「……………ぜつてー救つてやつからよ、覚悟しなー！」

ビームサーベルを一本に繋げ、構えた。

第は夢を見ていた。周囲は真っ暗で何も見えない
結局、自分じゃ勝つことも出来ない。

そんな感情しか、出てこなかつた。

そんな時だ。不意に懐かしく頼もしい感じが突然沸き上がりつてきた。

そして目の前が急に光りだし、自分の名前が聞こえた。

一夏「大丈夫か！ 篓！！」

篓が畠を覚ますと、そこには白式を装備した一夏が篓の畠の前に座つて真っ直ぐにこちらを見ていた。

篓「い……ち、か……お前……」

一夏「大丈夫だ。あ、それとこれ」

一夏が差し出したのは、真新しいリボンだ。それも、以前篓が髪を結んでいた物と同じで色違い。

一夏「誕生日、おめでとう」

7月7日。その日は篓の誕生日だ。もつとも、日が明けてしまつたので一日遅れてしまつた。

一夏「福音は俺に任せろ！」

その一夏の、白式の左腕には新武装・雪羅があつた。第一移行が完了した証拠だ。早速雪羅をクロ一形態に変え、福音の下へ行く。篓は手渡されたりボンで髪を結び、一夏の後を追つた。

一夏「輝羅！」

輝羅「一夏、お前……第一移行が済んだのか？ つていうか、大丈夫

か？」

一夏「ああ、大丈夫だ。それとこれ、データには雪羅つて出てた」

一夏はそつと見て、その左手を見せた。俺が束さんとこいたとき、そんなデータ見たことねーぞ。

その俺の油断が生じ、福音が一斉掃射をする。が、前に出た一夏の雪羅・シールドモードで塞がれた。その後、雪羅の手の平から荷電粒子ビームも出た。

すげえ、すげえぜ一夏。俺も負けられねえ、福音の操縦者もメアナも鈴も皆皆救つてやる！！

その俺の心がトリガーとなつたのか、フリーダムのワンオファビリティーが発動した。

輝羅「ワンオファビリティー……【SILENCE】」

読み取ると同時に、各部ボロボロだったのが見事に修復しシールドエネルギーも全快。チートじゃねーか、フリーダムのワンオファビリティーって……。

輝羅「行くぜ！」

すると、ワンオファビリティーが発動しているのか、ビームライフルの発射速度、起動力、何もかもがクリアになつた。

輝羅「一夏、俺も行くぜーー！」

一夏「ああ、後ろを頼むぜーー！」

輝羅「へつ、当たるなよーー！」

紅椿を纏っている篝は、自分に何か出来るか考えていた。一夏は第二移行を行つており、輝羅はワンオファビリティーを発動している。

篝「（私は……一夏の力になりたい。今度こそ……絶対……）」

その篝の心に反応したのか、紅椿が輝き出した。

ワンオファビリティー…【絢爛舞踏】の発動だ。

一夏「（ぐそ…シールドエネルギーが）」

雪羅を使いすぎて、シールドエネルギーを大量に消費してしまった。福音は輝羅が相手しているので、今の所一夏に害は無かつた。

そこに、ワンオファビリティーを発動している篝が一夏の隣に現れた。

一夏「篝！」

篝「一夏、受け取れ！」

差し出す篝の手を一夏は握り返す。するとどうという訳か、シールドエネルギーが元の数値にまで回復した。

これが、紅椿のワンオファビリティー…【絢爛舞踏】の能力。シールドエネルギーを増幅させ、尚且つ他のISに送る事が出来る。

一夏「サンキュー、第！」

第「ああ。行つてこい！一夏……」

一夏「オッケー！」

輝羅「（ちりあ、SEEDの限界時間か……）」

セシリアに鈴、ラウラにシャルロットもメアナも戦線復帰したが、
ビットも龍砲も決まらない。

シャルロットがアサルトライフル掃射するが、福音はそれを避ける。

ラウラ「甘い」

シユバルツェア・レーゲンのプラズマ砲が福音を捉え発射されるが、
これも避けられた。

そんな時だ、一夏が俺達に合流した。

一夏「待たせたな！」

輝羅「一夏、俺が合図を出す。零落白夜で福音の動きを止めろ……」

一夏「解った！」

一夏は雪片型を構え、展開しビーム刃を出す。

輝羅「今だ！」

俺の合図を出すと同時に、白式が金色に輝き、福音に向か零落白夜を繰り出す。一瞬怯む福音。俺は、福音に向かハイマットフルバーストを繰り出す。

一夏「零落白夜！」

ザシユツ！

輝羅「神に祈つたか？次に笑顔になつた時がお前の幸せつてな！！！」

俺がキメ台詞を吐いたその瞬間、全砲門が開き五つのビームが福音に向け発射された。

福音は装甲という装甲と頭部の翼が破壊された。

俺は操縦者を落ちる寸前で救出し、周囲を見回す。海面すれすれに浮かんでいる鈴とシャルロット、視界の端で滯空しているラウラとセシリア、一夏と篠、そしてメアナ。皆頑張ってくれたな。

輝羅「福音の歎き、作戦完了！－！」

そつ高らかに宣言する俺だった。

旅館の大宴会場。俺は勿論一夏達やメアナも正座で座らされている。当然だ、待機命令が出ているというのに無断で出撃し、福音を撃墜したからだ。因みに、俺が助けた福音の操縦者は今学園のスタッフが治療中らしい。

千冬「作戦完了」……と言いたい所だが、貴様等は重大な違反を犯した。学園に帰つたら貴様等全員には反省文と特別課題を出すからそのつもりでいる」

輝羅「すみませんでした」

摩耶「お、織斑先生、その位にして頂けませんか?」

スポーツドリンクを人数分抱えて持つて来た山田先生が織斑先生にそう言つた。確かに、2時間近く正座するのは慣れたものでは無い。実を言うと、俺は30分前から足の感覚が無くなつてしまつほど痺れていた。

千冬「…仕方ない。メディカルチェックを行つ。それと、よくやつてくれた、今日はゆつくり休め。それと響」

輝羅「は、はい！」

千冬「お前が助けた福音の操縦者だが、たつた今意識を取り戻した様だ」

輝羅「そうですか……良かつた」

俺は安堵の溜息をつき、痺れる足に鞭を打つて体質する。

輝羅「一夏、いつまでいるつもりだ?」

その後、一夏に冷たい十一の視線が放たれたのは言つまでもない。

「ねえねえ！ どうして出撃したの？」

セシリ亞「申し訳ありませんわ、言えない事になつておりますの」
その晩の夕食時、セシリ亞と鈴、ラウラとシャルロットが座つてい
る席に、ワイワイと数名の女子が寄つてゐる。俺はと言つと、一人
でぽつんと旅館の夕食を頬張つていた。

輝羅「あれー？ 一夏と簾の奴どこ行きやがつた？ ま、いつか」

何故か一人がいなかつた事に俺は気が付いた。

一夏は規則を破り、海を泳いでいた。そして泳ぎ疲れたのか、陸に
上がり腰を下ろす。

一夏が見上げる今宵の月の光は心の中にまで届く様に神秘的だ。
そんな彼の後ろで足音が聞こえてきた。振り返るとそこに白い水着
姿の簾がいた。しかも際どい。

簾「い、こんな所にいたのだな……」

一夏「あ、ああ……」

簾は自分の水着姿に羞恥し、一夏はそんな水着姿の簾に戸惑い背を
向ける様に岩場に座つていた。

しばらく沈黙が走るが、篠がその沈黙を破り一夏が振り向く。

篠「その……誕生日のプレゼント何だが……な」

一夏「何だ？」

篠「お、お前はショーナー・ショントコツのを知らぬのか！」

一夏「あー、いや、戦闘中だつたし……それに、そのリボン、似合つてゐるぞ」

篠「……そんなに似合つてゐるのか……？」

一夏「ああ

篠「そうか、似合つてゐるのだな。うん」

笑顔で返す一夏を見た篠は途端に心臓が激しく鼓動してし、頬を赤らめた。

やがて、お互に向き合つて一夏は篠の肩に手を乗せ一つになる

はづだつた。

一夏「ん？……い、！」

突如一夏の額に何かがぶつかつた。それは紛れも無く発射準備のブルー・ティアーズビットの銃口だつた。

ラウラ「姿が見えないと思えぱ……」

シャルロット「一夏あ、何をしているのかな？」

鈴音「よし。殺そう！」

セシリア「ふふ、ふふふふふふ……」

シユバルシェア・レーゲン、ラファール・リバイブ・カスタム、甲龍、そしてブルー・ティアーズを装着していた、ラウラ、シャルロット、鈴音、そして何故か絶賛ヤンデレモード中のセシリア達四人だった。

一夏「ひいー！ 篦、逃げるぞ！…」

篷「あ、おい！」

四人から逃げる様に一夏は篷を抱き抱えてその場を去った。その逃げ足は青のクウガ顔負けというほど。

そして、その後千冬から雷が落ちたのは言ひまでもない。

夕べ恐ろしい惨状をちらりと見てしまった俺は、結局一睡も出来なかつた。

まあ、眠れないから反省文の内容を考えるのに充分過ぎたと言えば過言でも無い。

輝羅「ふあ～あ」

しつかし、臨海学校楽しかったなあ。海、やっぱいいよなあ。あと

数日で夏休みだなあ。

そんな事を考えていたら、バスの入り口から見知らぬ誰かが搭乗してきた。一つ二つ位年上のその女性は、ツカツカと俺の近くまで歩み寄つて来た。

「ねえ、響くんて誰？」

輝羅「はい、俺ですけど」

その女人人は、俺の顔をまじまじと見詰め、言った。

ナターシャ「私、ナターシャ・ファイルス。福音の操縦者よ」

福音の操縦者！？歩いても大丈夫なのだろうかと俺は心底心配する。だが彼女は平気だと言わんばかりに胸を張つていた。

輝羅「あの、もう出歩いても大丈夫なんですか？」

ナターシャ「いいの。助けてくれてありがとうございます」

輝羅「いえ、とんでもない。俺は、誰ひとりとして、誰かの流す涙は見たく無いんです。皆には、笑顔でいてほしいんです」

だから俺はクウガとしての覚悟と、響輝羅としての覚悟を持った。

ナターシャ「有難うね、これは御礼よ」

ナターシャさんはそういうと、俺の頬に唇を当てた。って、何で！？

ナターシャさんが顔を離すと、そそくさとバスを降りていく。しばらく俺は、放心状態だったと、のほほんこと布仏本音が言つづ

ていた。

続
く

第五話 福音（後書き）

次回

やつて来た夏休み

輝羅の固有結界が発動される。

そして幼馴染みとの再会

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【再会】

第六話 再会（前書き）

今回から夏休み編です

作者オリジナルですが、ひぐらしネタ出ます。

クロスが苦手な方は回れ右でお願いします

第六話 再会

今日から夏休みを迎えた、俺達I.S学園の生徒たちは、ある意味各自適な生活を送っていた。
そういう俺はと言つと……。

クウガM「でりやあああああああああ！」

ズ・メビオ・ダ「ぬあつーー！」

未確認生命体五号こと、雌豹怪人であるズ・メビオ・ダに俺は必殺技であるマイティキックを放つた。

左肩に封印のマークを生成されたズ・メビオ・ダは、断末魔の叫び声をあげ、爆発した。

何故俺が、こうしてメビオを倒したかというと、夏休みを利用して実家に帰宅し、掃除をしたくて掃除用具を買いに行く途中にメビオを発見。そして今に至るのだ。

雑貨屋で新しい掃除用具を購入し、帰宅する俺の視界の端に見覚えのある碧色の髪をした少女がいた。

それは、俺が今の今まで会いたいと思っていた少女だった。

少女は自分の運命を呪つた。もともと運は人並みだと思っていたが、こうなるとは夢にも思わなかつた。

何故なら、彼女の前で汚い男三人が少女を袋のネズミにしていた。

鎌谷「お、お嬢ちゃん。何ヒトサマにぶつかつといて謝りも無し

に去ろうとすんじやい！？謝らんかいわれえ！！」

言葉と生れつきの恐持てフェイスで脅しているのは、長身の鎌谷。その背後にデブの豚山とチビの小山が「そうだそだー謝らないのがいけないんだー！」と、少女に追い撃ちをかけるように言った。鎌谷・豚山・小山の三人は、愛越学園を自主退学し自分勝手に恐喝やら婦女暴行未遂やらやらかしているので有名だ。それでも警察に捕まらないのは、親が何処かのお偉いさんなので、下手に手出し出来ないので。

そんな三人に、少女は反論する。

「何よ！ ちよつとぶつかつただけじやない？」

鎌谷「だから、謝れやーとんのや。今こいで土下座するか、それ
とも
ダアンもーなー場所で金裸にーしおきうナゾお?」

豚山「うほつ！親分最高つす！！」

小山「げへへへ」

三人の言つてる事が目茶苦茶過ぎて、少女はある意味引いていた。
そして恐怖していた。

そんな時だ。
一人の少年が買物袋を下げ、
鎌谷達に怒鳴った。

「このつ、ボケナス共があああ！お前等は解つてない！解つてない！」

鎌谷達はその少年に視線を移しながらも、少女を逃がさない様に少女を囲んでいた。

鎌谷「なんでえい！文句あんのかわれえ！」

その少年の叫び声に鎌谷達は怯え、更に少年は続ける。

「いいか？良くな聞けモンキー共！！ホモサピエンスと動物の違いは何か？そう！衣服の着用だ！！」

豚山「亦、亦モ?」

じつから勝手にやめてしまつていい。

「つまり人は衣服があつて初めて人なのだ！！」

正にその通りである。少女がそう納得し、熱弁する少年を見る。

「それを全部脱がす事でしか欲情出来ないお前等は人以下！動物と同じだ！！」

小山「な、なんだとおー」

「貴様等全員を矯正する……歯を食いしばれ！……」

すると、少年は鎌谷と豚山と小山に次々と殴つて、またも熱弁する。

「先程A▽の脱衣シーンを引き合いに出したな？」

鎌谷「ああ？」

「例えばここにコスプレロビデオがあつたとする。コスプレと一口に言つても、その裾野は広すぎる。それについて貴様等に講義する事は、B-29から落下傘で降りてきたヤンキー共に大和魂を一から説明するより困難この上極まりない！！だからここでは最も普及してゐると思われる制服系で説明する事にする！」

三人はポカンと口を開け、更に更に少年の話を聴き入つた。それでも尚少女を逃がさまいと、退路を塞いでいた。

「制服系の御三家といえは何か？答えてみる！！！ そうさなあ：制服・体操服・スクール水着だろ？ 尚セーラーかブレザーかの好みの違いは制服にカテゴライズするものとする。勿論ブルマかスパッツの違いも同様！ スク水も紺か白かの違いはあれどカテゴリーは同じ扱いだ！！」

「すざつ！つと、三人は後退りたじろぐ。

「どうだ！？ これだけでも甘美な響きがするであろう！ ではお前等三人がこちらの内の一つずつが好みであつたと仮定しよう！」

鎌谷「ぬああぬいい！？」

「おい！ ノッポ！ お前は制服だ！」

鎌谷「ああん？」

「デブ！ お前は体操服！」

豚山「ぶ、ぶう？！？」

「そしてチビはスク水だ！？」

小山「チビ言づなーー！」

三人の反応などお構い無しに続ける少年を、少女は微笑ましく見ていた。

「頭に思い描け！ 時間は三秒！ 描けたか！？ 妄想くらい自在にできろ！ 気合いが足りん！！ やり直せ！！ ではお前等の望む衣装が登場するHビデオがここにあるぞ、あると思え！ あると信じろ！！ 気合いを入れろ！！！ 返事は 押忍 か Sir Yes Sir だ！！ 馬鹿者それでも軍人か！！！」

そういうと少年はまたも鎌谷、豚山、小山に殴り付ける。しかも、裏拳。

ダメージがテカイのか、三人は怖じけづき、嫌々ながら描いた様だ。

「よし描けたようだな次に進むぞ。それらの萌え衣装が貴様等の馬鹿げた欲情に従い、一糸纏わぬ姿にひんむかれたと思うがいい！」

そう言われ、想像する三人は鼻の下を伸ばしている。

しかし少年は間違いを正すような形相で三人にまたも怒鳴る。

「だがおいお前等よく考えろ！！ 全部脱いだらもうそれはコスプレHじゃないぞ！？ 最近そういう詐欺紛いなAVが増えているが実に嘆かわしい！！」

鎌谷「確かにい！？」

「服を脱いだらもうそれは文明人ではない！動物だ――！全裸でしか欲情出来ない貴様等は、犬・猿・キジだ、きびだんごでも貰つて鬼ヶ島にでも失せろGet Back Here！！！因みに最近の東西雪解けに従い、ロシア系AVが大量に上陸しているな？そんなことも知らんのか？愚か者おおお！！制服系とロシア系を組み合わせたロシア美少女女子高生などというゲ ター2が抜けて三神合体出来ないような水と油の組み合わせが出ているようだが、本官は断じて認めたりしないぞお！！制服は日本の文化だ！！芸術だああ！！毛唐に日本の和の心など分かりはしない！！！」

豚山「おっほほー！」

鎌谷達は少年の熱弁に教えを説かれ、途中から上の空だつた。

「貴様等聞いているのか？軟弱スルメ共があああ！！歯を食いしばれ！今日は徹底的にしごく！！貴様等が自分の妄想でご飯三杯イケるまで今日は眠れないと思え！！！はいいいいいい！！！」
！指導指導指導おおおお！！！」

鎌谷「俺達が間違つてました！！」

豚山「ふ、ふう！！」

小山「出直して来ます！！」

そういうながら三人は土下座し、その場から逃げる様に逃げ去つた。教えを説かれた様な雰囲気だつたが、何故土下座して、そして走り去つたのか、それは鎌谷達にしか知らない。

輝羅「俺の固有結界も、ますます磨きがかかつた様だな。今に筹達の固有結界【一夏】LOVEに太刀打ち出来るくらいに磨きをかけてやるぜ！」

そう俺が言い終えると、俺が今まで一番会いたかった人物がいた。

輝羅「よつ、りみ、魅緒」

魅緒「輝羅、久しぶりね」

俺は買い物袋を下げ、魅緒と共に帰宅した。道中昔懐かしい会話をしていた。それもあつという間で自宅に到着。久々に帰ってきた我が家は、埃が溜まっていた。いやあ、何日振りだろうな、我が家は。

魅緒「随分掃除サボつてたよしね」

輝羅「仕方ないだろ、寮生活だつたんだからよー」

魅緒「寮？何処の学校？」

そつこえば、今まで魅緒に話して無かつたしな。教えとくか。

輝羅「実は、ひょんなことから東さんと会つちやつてー……IS適合しちゃつてー……後は御想像の通り」

魅緒「え！？じゃあ今、女子高に男子一人つて？そういう事！？」

輝羅「まあ、そういうな」

俺はそういうの、買い物袋から真新しいハンドモップで埃を取りはじめる。魅緒も何も言わなくなり、掃除を手伝ってくれた。ふと、俺のケータイに電話がかかってきた。一夏からだ。

輝羅「おっす一夏ーどうした？」

一夏「どうした？ やけに声が弾んでるやん

輝羅「まあ、いいことよ。それどうした？」

一夏「今お前実家に帰ってるだろ？」

輝羅「ああ、今掃除してる所」

一夏「俺も暇だし、手伝つか？」

輝羅「ああ、頼む」

そう言つて、俺は通話を終えて作業に戻る。

しばらくして、やつて来たのは一夏を始め、鈴、セシリ亞、シャルロット、ラウラ、そしてメアナというメンツだった。

鈴と鈴は魅緒を見るなり、再会の喜びに浸っていた。その後ろで、俺は一夏の肩に手を置き小声で話す。

輝羅「鈴とメアナまではいい。なのに、なんでその他大勢までいるんだ来るんだ？」

一夏「スマン。簫と鈴を誘つたのは俺の独断だが、後は想像に任せ
る」

輝羅「つたぐ、しゃーねーなー。掃除手伝ってくれるなら、一階は
やるなよ?絶対にやるなよ!?」

魅緒「そういえば、私輝羅の部屋見たこと無になー」

簫「同じく」

鈴音「以下同文」

当たり前だ!俺の秘密の花園など見せてたまるか!

俺は階段を登りながら、一夏達に役割を言つた。

輝羅「一夏と簫、取り合えずリビングの掃除を頼む。セシリ亞は悪
いけど玄関の掃除お願ひな。鈴、風呂場頼む。シャルロットはキッ
チンの掃除頼む。リカとメアナは、出で頼む。俺は浴室とトイ
レ掃除やつてから」

俺の指示を聞いて、思わずガツツポーズしている簫と作業に取り掛
かる一夏とメアナを覗いた四名が俺に詰め寄る。

セシリ亞「響さんよろこですか?」

鈴音「ちよつと。」れつてびつての事よ

シャルロット「それは無いんじゃ無いかな?僕達だって一夏と一緒に
にいたいんだけど」

「ウラ「…何故私が」「出し等と…」

輝羅「ほつ。お前らは自分がサボつてゐる所を一夏に見られ残念がられたいと言つのか？残念だつたなあ、昔の一夏の写真が幾つかここにあるんだが、サボるんだつたらあげられねーな。それに一生懸命やつてる所を見せて猛アピールつていう手もあるんじや無いのか？」

それを聞いた四人は先程とは打つて変わつて俺の指示通りに掃除を行ひはじめた。

さてと、俺もとつとと始めますかな。

右腕にある俺の待機状態のフリーダムの内蔵型時計の時刻は正午を刺していた。昼メシになつたその瞬間に、奇跡的に俺ん家の掃除は終わつた。

四人には報酬として、小学生の時の一夏の写真を見せた。運動会に

学芸会。中学生の写真も幾つかあり、それも見せて渡した。

輝羅「お疲れさん。今飯作つから、それまでテレビ見るなりゲームするなり昼寝するなり何なりしてくれ」

さて、魅緒とメアナは未だしも、その他が危険だ。ストッパー約としてメアナがいるから多分大丈夫だと思つ。

一品目を作る最中、台所に魅緒が来た。髪を束ねている所から手伝いに来たのだろう。

魅緒「私、手伝つよ」

輝羅「サンキュー、助かるぜ。じゃあ、茄子炒り作るから茄子剥くの手伝ってくれ」

魅緒「うん」

調理中の輝羅と魅緒を、一夏達は覗いていた。

輝羅と魅緒の仲を知るのは、一夏と篳と鈴だけだ。そしてその仲を羨ましがるのは、言わずもがな。影で一夏達は小声で会話していた。

一夏「さすが幼稚園時代からの幼馴染み。眩しい、眩しちゃうね」

篳「といつより、魅緒はいつの間に輝羅とああいう関係に?」

鈴音「そういえば、私が転校する以前から付き合っていたわね」

セシリア「俗に言つてリア充といつものですね」

シャルロット「(羨ましいなあ。僕も一夏とあんな風に、一緒に料理したいなあ)」

ラウラ「しかし、輝羅も抜け目が無いといつか」

メアナ「……所でいつまで覗くつもりでいるのか?」

輝羅「出来たぞ！俺と魅緒の自信作！」

そうテーブルに出したのは、茄子を主役に使いペーマンを加え程よい味付けに仕上げた茄子炒りだ。

他におかずを作りたかったが……生憎食材を買つてき忘れたのだ。しばらくして、茄子炒りを完食し後は悠々自適に過ごすことにして。

輝羅「さてと、俺を含めここには何人居る？ 篠、答える！」

篠「何故私が……！」

輝羅「あ、これどうぞ」

そつ俺が篠に差し出したのは、中学生時代の一夏の「写真」だ。受けとった篠は素直に俺の指示に従つた。

篠「私と、一夏。鈴にセシリ亞、シャルにラウラにメアナ、そして輝羅と魅緒だ」

輝羅「そうだ。九人もいるんだ！ これについてはまだ一つ！」

俺の発言に一夏達が「ククリと生睡を飲み下し、魅緒だけは分かつたよつの表情だつた。

俺はコーヒーを取出し、皆に告げる。

輝羅「三人一組で、コーヒーを煎れる。審査するのは残りの一組だ！ そして、勝者はビリの組に一つの罰ゲームを下す！」

どこの天の道を往く男の様に天を指差し、俺は高らかに宣言する。既に豆は用意している。モカは勿論キリマンジャロ、ブルーマウンテン等その他諸々。

輝羅「罰ゲームと言つても痛い思いや恥ずかしい思いもしなくていい。つていうかむしろするな。ただ、パシリまでならセーフだ。後は誰か質問あるか?」

鈴音「一人の人を独り占めつてあり?」

輝羅「これはあくまでもチーム戦だ!抜け駆けは禁止!破つたらそれは、…」

鈴音「それは…?」

輝羅「……冷ややかな目で見られるであります。それも自分が一番気にしている人物からだ」

注意事項も言つたことで、早速あみだくじだ。

紙にあみだくじを書き上部に名前と下部にAからCをアトランダムに記入し、順々にあみだくじをなぞつていき、チームが決まった。

Aチーム、俺 魅緒 メアナ

Bチーム、一夏 篠 ラウラ

Cチーム、シャルロット、鈴、セシリア

以上のチームで決まる。

即座に三チームはスクラムを組み、どの豆をどれくらいに配合するか決めていた。

輝羅「いいか、ここはハワイモカを五粒程度にブルーマウンテンをふたさじで行くぞ」

魅緒「オッケー！」

メアナ「了解で」

ややあって、先にCチームがコーヒーを煎れた。
色も香りもちよづびいい。だがちと濃い。

セシリア「一夏さん。後おまけに響さん。美味しいですか？」

一夏「ああ。美味しい」

輝羅「だがちと濃い」

続いて俺が率いるAチーム。先程俺が提案したように配合する。
湯気がいいくらいに立ち、優しい香りを放っていた。

輝羅「因みにここで豆知識！コーヒーはアイスで飲んだ方がいい。
元々コーヒーは熱帯で育てられ、アイスコーヒーとして出されてい
た。そして本質を知るなら、俺はブラック無糖を薦めるぜ」

因みに、俺達Aチームのコーヒーは中の上位だった。

一夏「次は俺達のコーヒーだ。ラウラがいいアドバイスくれたから、
美味しいことは間違いない」

さて、そのお点前はいかに。

輝羅「ん？」

「ウラ「どうした?」

輝羅「いい濃さだ。申し分ない。しかも豆を粗く挽いたな?」

「ウラ「その通りだ」

輝羅「色もいい。やはり美味しい」

高得点だな。

そして審査結果は、一位Bチーム、二位Cチームだった。
罰ゲームのパシリ、それを受けた三人は筆舌しがたい状況になつて
いた。

コーヒー対決の次は、テレビゲームで対戦することとなつた。
因みに一夏の家にはテレビゲームの類が無いらしい。

対戦するゲームは昔ながらの格闘ゲームで最大四人対戦まで可能な
ゲームだ。

しかし、そのゲームはひと昔前のゲームだ。巷ではE-Sを使う格闘
ゲームがあるが、あれは同じ作品でも各国で販売されている作品ご
とにキャラのスペックが違うらしい。

そんなひと昔前のゲームとは、スマーラだ。しかもハードはゲーム
コープ。コントローラーは三つもあれば充分だ。

輝羅「ルールは至つて簡単。ストック6で一人一回落ちたら次のブ
レイヤーに交代!ストックが零になつた時点で負けだ!」

チームは先ほどの組み合わせで充分だう。

俺達Aチームが選択したのは中級者向けのリーグで俺の愛用キャラ
だ。

Bチームはマースだ。そういうえば一夏の奴マルス得意だつたな。
Cチームはオールマイティなマリ。っていうか、シャルロットは

ともかく、セシリアはコントローラーを握った事あるのか？まあいいや。

順番は、Aチーム・メアナ 魅緒 俺、Bチーム・篠 ラウラ
夏、Cチーム・シャルロット、セシリア、鈴の各順番だ。
それじゃ、ゲームスタート！

輝羅「つしゃ、勝つた」

一夏（なーんかはしょられた様な気が……）

輝羅一夏、細かい事は気にするな」

やうやく、また色々とやりたい事は………「あれ?

輝羅一なあ、メアナ何処行二た?上

篇一 文アカなひ
舟溝にを徳らぬむ難い たか

セシリアー先程私もお弔いに行きましたが、おせんでしたわ」

まさかと思った俺は、瞬時加速並の速度で2階へ走り、俺の部屋に突入する。

ドアノブに手を掛け開いた瞬間、俺は目を疑った。何故ならメアナが正座で俺の秘蔵の本を読んでいた。

メアナ「お兄ちやん、不潔で！」やる

見るな、そんなクズに向けるよつた視線を俺に向けるな！向けるなら犯罪者に、もしくは、どじそのニンニク好きで黄色くて屁をこき尚且つ金の亡者であるワオに向けるべきだろお！

そして、俺の背後で一夏達登場！ああ、俺の人生オワタ。

場所は変わつてリビング。俺は正座をさせられ、女子達は俺を囲み、俺の目の前には先程メアナが読んでいた、俺の秘蔵の萌え本数冊。味方は魅緒だけだった。

輝羅「……」

メアナ「お兄ちやん、正直に言つで！」やる。されば、何で！」やるか？」

メアナ同様篠、セシリ亞、鈴、シャルロッタ、ラウラ達は俺を覆む様な目で見ていた。

メアナは俺の萌え本に指を指して言つた。俺は正直に答えるしか無かつた。

輝羅「……未確認との戦闘で擦り減らした俺の心を癒してくれるマストアイテム。だが、三次元ではなく、一次元だ！！」

篠「堂々と言つことか！」

篠はそろい、竹刀で俺の頭を叩いた。

確かに堂々と叫んでいたではないが、何も強く叩く必要も無いだらうが。

メアナ「お兄ちやん、ちゅうひつひつと痛いでいるが、我慢するでいいやる」

一夏「生きてるか?」

輝羅「……………多分」

今まで何処に行つたのか分からぬ一夏が、顔面癌といふだらけで解放された俺にそう言った。

因みに、魅緒は仕事があるらしく俺リンチ中にマネージャーの車に乗つて帰つて行つた。篝達は俺の萌え本を廃棄することはしなかつたものの、ストックしておいたお菓子を九割を食べていた。そう、今も。

輝羅「なあ、一夏」

一夏「どうした?」

輝羅「男が変態で何が悪い?」

一夏「あー、いやあ、難しい所だな。それにしても、お前の部屋以外にスッキリしてんだな」

輝羅「さつきの萌え本がベッドの下にあつた以外はな

とにかく俺は、明日も平和になつて欲しいと願うばかりだった。

続く

第六話 再会（後書き）

次回

相次ぐ転落死が工学園の付近で起きていた

輝羅は生徒会長に呼ばれる

そして、青のクウガが

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【転落】

第七話 転落（前書き）

今回もオリジナルで行きます

時系列は鈴音が一夏にプールのチケットを渡した時間帯です

第七話 転落

俺は今、中学時代の友人の家で定食屋でもある五反田食堂で昼食を摂っていた。野菜炒め定食を食べている。

輝羅「（ああ、日本人でよかった）」

そう喜んだのもつかの間。俺は代金を払い店を出ると…。

楯無「はうー」

学園の生徒会長が店を出た俺を待伏させていた。
そして捕まらまいとダッシュで逃げ出す俺を、生徒会長はテキサスのカウボーイの様に縄で輪を作り、頭上で回し、追う。

楯無「ちょっと逃げないと出よーーきれーなおねーさんからどうして逃げるのー？」

輝羅「いやいやいやいやいやいやーおかしいでしょ、追回してるのでー！」

因みに、生徒会長は学園でメツチャクチャ強い。もうこの人一人で福音相手にした方がいいと思つ。

つか逃げないと俺の操が、操があああーー

輝羅「うおおおおおーー！アンタと関わったら、俺の人生Bad Endですかーー！魅緒おーー！」

そして逃げ回る内に、あえなく俺は生徒会長に捕まってしまった。

輝羅「連續転落死事件？」

楯無「そ、最近この近くで学園の生徒じゃ無いけど、イロイロと迷惑かける輩が次々に転落してんのよね」

転落死……つてこたあ……。

輝羅「といふことは、6号ですか？」

楯無「ええ。地域の監視カメラに飛蝗のような未確認が映つてたの。見て」

先程と打つて変わつて会長は少し抑えめな声色で俺にその監視カメラの映像を見せた。

ほんの一瞬で、我が物顔で歩いていた男は素早く動く影に上に連れ去られ、そして転落し命を落とした。

今度のゲゲルは……もしかして……。

輝羅「未確認は、もしかして……」

楯無「そ、4号……いいえ、響輝羅君。貴方が目的なはずよ」

さすが生徒会長。4号一だつていう事を知つていたか。

輝羅「だとしたら、何であいつらは直接俺じゃ無くて、関係も無い人を？」

楯無「おびき寄せる…………餌だとしたら？簡単に説明出来るわ」

俺をおびき寄せる？馬鹿な！ただそんな為に何の関係も無い人間を殺すんだよ。いくら怪人で戦闘種族だったとしても、これは許される事じゃない。

輝羅「俺、何の為に戦ってきたかもう…………」

楯無「わからないじゃ済まされないわ。おねーさん、そんな弱気な男の「、嫌いよ？」

生徒会長がそう言つんじや、俺しか出来ねえつて事か。

輝羅「俺、やります。つていうか、これ以上誰も死なせたくない。これ以上、誰ひとり笑顔になれないなんてもう嫌なんです」

そう言つて俺は退室する。もう誰も死なせたくない！死なせたくないんだ！！

さて、まずはどうすつかな。おびき寄せるつたつて、当の俺はどうすればいいのか？

そんな俺の悩みもいざしらず、何かのチケットを持った鈴がスキップで現れる。

輝羅「どうした鈴。何をそんなに」

鈴音「えへー。一夏とヒート出来るんだー、プールでー」

へー、もうプールの時期か……つていうかこの前福音騒ぎ以来じゃねーのか?ま、鈴にとっちゃ『ゴタゴタしてたからいいかもな。

輝羅「そつか。ま、頑張れよー」

鈴音「あーい」

さてと。一夏の事だ、チケット渡されても『データだとは気が付かんだろうに。ま、一時の夢でも見るんだな。

奴はこの学園の周囲で次のゲゲルを行う見たいだ。なので俺は、オーブンカフェでコーヒー・ブレイク。

もつ何杯目なのかわからぬ位飲んだかわからなくなってしまった俺は精算を済ませた。

かれこれ30分ほどたつたというのに、断末魔の叫び声が聞こえて来ない。

輝羅「駄目だ……どこにいるんだ、飛蝗野郎」

すると、俺の視線の先でドラマの撮影だらうか、魅緒がカメラの前で芝居していた。

あ、そういうえば今日は【市藤仁多可参茄子】の収録だつて、言つてたしな。

俺が魅緒に向けサムズアップすると、魅緒もお返しに俺に向けサム

ズアップをした。あっちも気が付いていたか。

「ハア……ハア……魅緒たあーん！」

「も、萌えますぞお！」

若干一一名勘違いな奴がいるが、あいつらは魅緒に被害は出さないだろう。……多分。

路地裏を歩くこと四分。

俺は5号事、飛蝗怪人ズ・バヅー・バを見付けた。

ズ・バヅー・バ「また会つたな。クウガ！」

輝羅「変身！」

ズ・バヅー・バが言うと、俺はすかさず変身。その際、落ちていた鉄パイプを広い変身したため青のクウガに変身した。

クウガD「俺をおびき寄せるたあ、随分賢くなつたじゃねーの？」

ズ・バヅー・バ「言うな。冥土の土産に教えてやるつ」

何をだ？

ズ・バヅー・バ「今回のゲゲルはベ集団もヌ集団も参加が可能」

クウガロ「え、ンにラに、ゴ・メ・ズ以外にも、あるのか、グロンギは」

ズ・バヅー・バ「そうだ。だがもう教える事は無い。前回と違い、
そう簡単に倒せると思つた……」

クウガロ「バーロー……やられてたまるかよ……」

奴の飛び蹴りを、ドーラゴンロッドで払つた俺は、追撃を食らわす。

クウガロ「おうつ……！」

ズ・バヅー・バ「があつ……！」

バヅーが落ちた地点は、ゴミが積んである場所。起き上がるバヅーの頭に、悲しいまでに魚の骨が刺さり、バナナの皮が乗つかった。

……ギヤグ補正って奴か？ 何かあいつがちょっぴり可哀相な気が……。

ズ・バヅー・バ「ぐう……。まだあ……んう……！？」

すると何処からか、匂いが周囲を立ち込めた。この氣味が悪い匂いは俺でも分かる。腐臭だ。生ゴミの中に腐った生ゴミがあつたのだろう。

ズ・バヅー・バ「命拾いしたな」

そういうと、バヅーは建物の上へと逃げ出す。

俺は変身を解き、路地から出た。

魅緒達は撮影が終了したのか、もう退却している。俺もそろそろ寮

に戻るかな。

その夜。俺は一夏に昼間の事を聞いた。

輝羅「そういうえば一夏」

一夏「どうした?」

輝羅「昼間鈴に会つたんだが、あいつお前に何か渡してなかつたか
?」

一夏「ああ。プールのチケットな。あれの日付、俺ちょっと手が放
せない用事があつたから、セシリ亞に渡したぜ」

ああ、鈴哀れ。

輝羅「何て言つて渡したんだ?」

一夏「ん? ただ渡して、集合時間教えただけだが…」

馬鹿だ。自分は行けないからとか言えないのか?
ま、いつか。一夏だし。
そしてセシリ亞、哀れ。

時は進み深夜。

とある場所、バジーは人間体となり—クウガ（輝羅）—に付けられた傷が癒えぬまま、壁に体を預けていた。

バジー「クウガあ……おのれえ……」

「哀れだ、バジー」

バジーが声のする右側を見ると、筋肉隆々の男が立っていた。その男は姿を変え、サイ怪人のズ・ザイン・ダがそこにいた。

ザインはバジーを無理矢理立たせ、その腹に自身の角を突き通した。

ズ・ザイン・ダ「貴様は、ゴウマより使えぬ男だ。部下の世話をは

疲れる」

ズ集団の首領ボスのザインは、バジーの亡きがらを、近くの海に投げ捨てた。

俺は朝刊を読み、バジーを逃がした事に後悔した。

バジーは身元不明死体とされ無縁仏になつたと書かれていた。死因は腹部の刺し傷。傷の大きさからすると、まるでサイの角に刺された様な傷だと書かれていた。

輝羅「……ザイン……てめえかよ……」

続
<

第七話 転落（後書き）

次回

水面下に活動するグロングギ

輝羅はたまたま寄った店でトラブルに遭う

戦わなければ、生き残れない

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【障害】

第八話 障害（前書き）

今回もオリジナルな展開がありますので、読みたくない、そういう方は回れ右で退室下さい

そして、これからも応援して下さる方々、クロスオーバーは大丈夫ですと言つ方々はお進み下さい

第八話 障害

輝羅「ダーアーツ！」

メアナ「行つて、ファング！」

俺は今、メアナと模擬戦闘を行つていた。これは生徒会長が提案したものだ。

会長いわく一夏は若干だが弱い部類に入るらしく、変わりに俺のデータを取りたいらしい。

そんな俺は今、メアナの放つダークネス・サイズのファングを避続ける。

メアナ「そこお！」

輝羅「なつ！」

回避地点を予測してか、掌部ビーム砲が俺に向けて発射した。俺はそれをシールドで防ぐが、メアナの姿が見えなくなつた。ワンオファビリティーのファントムモードか……。

輝羅「……何処だ」

メアナ「！」だよ！」

輝羅「つおつ！」

突如ファントムモードを解除し、ダークネス・サイズの斧状のダークネス・アックスという部分で俺をたたき落とした。

楯無くはーい、そこまでえー」ぐるーたまーーへ

輝羅「あー、やつと終わったー…つかメアナつえーな、マジ完敗だ」

メアナ「いやいや、お兄ちゃんも強いでござるよ。ファングを切り落とすなんて、至難の技でござる」

アリーナを出る俺等二人は更衣室を前に一旦別れた。実は今日この模擬戦は俺とメアナの賭け事なのだ。俺が勝てば、和菓子に合う緑茶をメアナに煎れて貰う。メアナが勝てば、今日一日俺はメアナの荷物持ち。なので、メアナが勝ったので後者が当て嵌まる。

私服に着替えた俺達は、まずバスに乗り目的地まで移動する。その中で、俺達はあの二人を目撃する。

輝羅「お、シャルロットとラウラ。何だ?お前等も買いもんか?」

シャルロット「うん。実はちょっと新しい服をね。後はラウラのパジャマ」

あー、そういうえばラウラは生粋の軍人だから、寝巻とファッショントリードみたいだ。その本人はバスの窓の景色バッカリを見ていた。

シャルロット「それと、僕の事はシャルでいいよ」

輝羅「ああ、いいぜシャル。つと、そういうえばこの先のショッピン

グモールで美味しいカレー屋があるんだけじゃ、昼メシどうだ？俺奢るぜ」

時は進み、昼時になつた。美味しいと評判のカレー屋は、何故か潰れていた。

俺はその跡地を見て、両膝を着きうなだれた。

輝羅「嘘だろ……ウゾダンドンド」「ドーンー！」

メアナ「（お昼……どうするで）」ざるか？シャル殿ラウラ殿（）」

ラウラ「（私は別に食べられれば問題は無い）」

シャルロット「（輝羅が可哀相だよ……）」

輝羅「いいんだぞ、声に出しても」

そして昼食はオシャレと評判のオープンカフェ。メニューの中にカレー関連は無いが、ここのかつらは美味しいと店員さんが言った。そして俺の真後ろで、スーツを着た女性が「ああでもない」「こうでもない」と頭を抱え悩んでいた。俺とシャルは気になり、その人に声をかけた。

輝羅「あの～……」

シャルロット「……どうしたんですか？」

するとその女性は振り返り、俺ら四人を見て叫んだ。

「これで決まり！」

何が決まりなのか、俺達は分からなかった。

「それじゃ、よろしくね」

連れて来られたのはメイド＆執事喫茶。俺とシャルは執事の格好でメアナとラウラがメイド服だった。

先程の女性はこの店の偉い人で、従業員が急に出勤不可能な状況になり、先程のオープンカフェで唸っていた。そこを声をかけた俺達を見て、臨時の従業員を見付けたのだ。

輝羅「お待たせしました。御注文の【乗つてけ「一ラサワー」と【不死身のアイスクリーム】でございます」

シャルロット「お待たせしました、アイスコーヒーです」

ラウラ「コーヒーだ。何? 賴んでない? 貴様等客だらう」

メアナ「アイスティーでござる。ゆつくりしていってござるよ」

取り合えず、頼まれた事だし精一杯頑張りうと思い、接客等の仕事を請け負う。そんな中、ラウラのSに萌える男達がいたが、俺はさほど気にはしなかった。

何事も無く、ただただ時間が進んでいた。意外と俺はこの仕事

にやり甲斐といふものを芽生えてしまった。

ただそれも、一瞬の内に崩壊した。

「うおらーてめえら動くんじゃねえ！ぶつ殺すぞ！！」

突如、店に逃走中なのか、銀行強盗が目だし帽を被り、マシンガンやら拳銃を握り、現金が入っているだろう麻袋を担いでいた。漫画に出そうな銀行強盗つて恥ずかしく無いのか？そんな格好だった。物影に身を隠す俺等4人以外に、客が6人、店員3人の計13人。あいつらはこの人数を人質に警察への要求を開始した。

「いいか！人質を殺されたくないれば、まず逃走用のワゴンを用意しろ！発信機の類なんぞ付けてみろ！ワシ等には、それを見付ける優秀な人材がある！！」

何処で勧誘したんだ？

小岩くわ、分かつた。発信機は付けない！直ぐに手配する！

あれ？拡声器から聞こえて来る刑事さんの声に聞き覚えがあるな。そうか、確か捜査一課の小岩さんだ。だつたら一暴れすつか。

輝羅「ラウラ、ぶつぶすぞ」

ラウラ「銀行強盗をか？」

輝羅「手伝えば、特製一夏プリントハンドタオルを贈呈するんだが

…」

ラウラ「指示に従うぞ、k」

輝羅「おつたこ！」

まづはつと。

輝羅「シャルとメアナは俺とワカラが銀行強盗をぶつ潰してゐる間に客と店員の避難誘導を頼む」

ワカラ「私とくが敵を排除と同時に裏口から避難しろ」

メアナ「了解だ」

シャルロジト「（戦つ執事と戦つメイドかあ……）うん、分かった
！」

輝羅「んじやワカラ、逃走用のワゴンが来たら作戦開始だ！」

ワカラ「了解した」

後は、小茜をんじやちょっとメールを……転送……携帯はマナーモードにしてから、あこつらに気付かれる心配は無

い。

頼むぜ……小茜をとー

小茜「おー、ワゴンはまだか！」

巡査「もう少しです。しかし……」

小岩「しかしどうしたんだ？」

巡査「先程避難に成功したオーナーから、人質のリストを提出させて頂いたんですが……その中にE.S学園の生徒四人がいるんですよ、ほらこの通りです」

小岩は巡査から受けとつたリストを見た。途端、強張った表情をしていた小岩の顔が緩み、その場に居た警官隊に向かつて言つた。

小岩「君達は実に幸運だ。人質の中に、この状況を覆す馬鹿がいる！」

それを聞いた警官隊は首を傾げ、何言つてるんだこの人はと言わんばかりの表情で小岩を見ていた。
その中の巡査二人がこゝそと呟いた。

「なあ、小岩さんの伝説つて本当なのか？」

「伝説つて？」

「あれだよ、警視庁未確認生命体対策本部の一員での未確認生命体第4号」と共闘したつて

「そちらしいぜ。何でも、未確認と何度も邂逅しても生還してんだけ？ある意味無敵だよ」

小岩「聞こえてるが、無駄口は余りたたくな」

小岩は携帯に届いていた輝羅からのメールを読み取りながら、巡査

一人に注意した。

小岩「（響さん、いつもながら貴方は無茶しすぎですね）

輝羅「いいからウラ、作戦はさつを書いた通り。俺が合図する

ラウラ「私が先に先制し、奴らの死角からkが突くー。」

輝羅「上等！」

俺はサムズアップし、そうしゃべり、手を一回高く上げ振り下ろす。ラウラが手前の出っ歯をなぶり、左右にいた双子の顔面に拳を突き出す。

残るは親玉。俺は壁を蹴り、親玉に近付く。このまま踵落しで奴の脳天を蹴り飛ばせば……。

「んん……？」

輝羅「やつべー！」

「おひあー。」

輝羅「……つがはつー！」

ちいつ、気付かれたか。にしても、俺の足を掴んで下にたたき付けるたあ……並じやねえな。

「おお？ あんだよ人質殆ど逃げてんじゃねえか！！」

つてこたあ、シャル達は脱出に成功したつて事か。

「ハツーもつ人質などいりでもよい」

輝羅「あんだと…」

突如俺を、銀行強盗の頭はラウラとのびてる部下を無視し外に連れ出した。

警官隊が見守る中、俺を解放した。

輝羅「なあ……銀行強盗してまで… 一体何が目的だ。答えろよ…」

「焦るな。ゲゲルの目的が今達成された……」

輝羅「ゲゲル…… つてまさか！」

「その通り！ 今回の俺のゲゲルはリントの金と呼ばれる紙切れを強奪し、リントが集まる建物に籠城する。それが今回の俺のゲゲルだ！」

輝羅「…………」

その他『…………』

駄目だこいつ。完つ全に頭逝かれてやがる。

すると、その銀行強盗の頭はみるみるうちに未確認生命体第八号ことメ・バヂス・バに変身した。

輝羅「バヂス！？」

メ・バヂス・バ「さてと、今日からは俺はゴ・バヂス・バだ！」

輝羅「させねえよ！変身！」

俺は小岩さん率いる警官隊とラウラとシャルそしてメアナ達の前で変身する。クウガヘト。

黄色いクワガタムシの様な角、赤い鎧に赤い瞳、黒いボディ、そして靈石アマダムを詰め込んだ古代のベルト・アークル。これが、俺のもう一つの姿だ。

クウガM「馬鹿馬鹿しいゲゲルだけどもよおーお前に一つ聞きたい」ズ・バヂス・バ「何も教えぬ。間抜けなバジーの下へ引導を渡す！」

クウガM「うぜえんだよ！虫頭！」

強気で言つ俺だが、バヂスは得意のスピードで俺を翻弄する。奴は常に俺の死角から攻撃する。奴の得意とする技は上空から針を放出、狙つたターゲットの脳天を撃ち抜く。そろそろ俺も限界か……。

クウガM「何処だ！」

ズ・バヂス・バ「ここだ！」

クウガM「ぐあつ……！」

ズ・バヂス・バ「これでどぎめだ。今樂にしてやる

そういうとバヂスは羽を響かせモチーフの蜂の様に空高く上昇する。手は、今しか無い！

クウガM「小岩さん、拳銃貸してください！」

小岩「ほいきた！」

小岩さんが俺に向かつて拳銃を投げ渡し、俺はそれを受け取る。左手を引き、拳銃を握った右手を動かし、俺は叫ぶ。

クウガM「超変身！」

たちまち俺の姿は緑色の防弾チョッキの様な形になり、左肩だけにショルダーアーマーが出現し、バツクルと目は緑色に変化する。緑のクウガ、ペガサスフォームだ！

クウガP「すう……」

意識を一点に集中し、持ち前の超感覚で上空のバヂスを捉える。奴が針を放出し、それが俺に向かう。ストレスの所で針を指一本で払いのけ、拳銃から原子レベルで変換されたペガサスボウガンの弓を引き、バヂス目掛け引き金を放つ。

クウガP「ハツ！」

ズ・バヂス・バ「うがつ！」

上空でバツクルに直接当たつたのか、空中で爆破した。青空に見える爆炎をバツクに、俺は変身を解く。

使用時間ギリギリだつたのか、変身を解いたその瞬間俺は真っ直ぐ立ち上がる事が出来なかつた。それを心配（友人としてなのか）してシャルとラウラが近寄る。

シャルロット「大丈夫？輝羅」

ラウラ「お前、拳銃も扱えるのか？」

輝羅「あんまし触つた事は無いな、出店の射的以外。縁のクウガに変身するときは、いつも小岩さんから借りてたし」

野次馬に警官隊もいつの間にか撤退していた。

すると、メアナが俺に近寄り、いつも見せない憎悪の目で俺を見ていた。そういえば、俺メアナの前で変身しなかつたけ。つていうか、何でメアナそんな目で俺を？

メアナ「……4号つて……お兄ちゃんも未確認なんでござるか！！」

突然強い口調で俺に食つてかかるメアナ。その目は涙で溢れていた。

メアナ「私の両親は……数年前、ここ日本に来てたでござる。だけど、未確認生命体第10号に殺されたでござる……！」

輝羅「メア」

メアナ「だから、私は未確認を一生許さないでござる。勿論、二号も四号も！」

そう言い残し、メアナは学園へ去つて行つた。
ギイガの時があ……そういえば、犠牲者の中にカナダ人がリストに

記載されてたつて。

輝羅「俺、皆の笑顔の為に……戦っていた筈なのに……」

シャルロット「……」

輝羅「ハハ……なつさけねえな、俺」

ラウラ「世の中良いこともあれば悪いこともある。だが問題は……」

輝羅「……なんで未確認生命体が復活したかだ」

シャルロット「ぐうんぎ? なにそれ」

輝羅「戦闘種族グロンギ。超古代の時代に殺戮ゲームを行っていた集団。怪人体とは別に人間体があるが、その人間体は普通の人間と同じ構造になつてんだ」

それからも俺は、ラウラとシャルにグロンギについて話した。階級・モチーフとなるもの・奴らは自分の地位を上げるために人殺しという名のゲームをしている。そう言った。そして、クウガに選ばれた人間もまた、いずれグロンギと同じ様になるかも知れないと。

輝羅「元々このベルト、とある遺跡の中にあつたんだ。棺の中にあつた古代日本人のミイラの腰にな」

ラウラ「古代の日本にそんな技術が?」

輝羅「さあな。俺もこのベルトの事あまり知らないし。悩んだつて仕方ないし、そろそろ帰るか」

シャルロット「それでいいのかな？」

輝羅「大丈夫大丈夫！」

続く

第八話 障害（後書き）

未確認生命体第十号の復活
メ・ギイガ・ギ

輝羅の16回目の誕生日

そして、解かれる誤解

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【紫紺】

第九話 紫紺

あれから数日。メアナは極端に俺から避けていた。今まで親しかった妹分は、籌相手にはいつも通り。

そんな今日は普通の高校で言う当校日の様なもの。俺は、蒸し暑い廊下を歩いていた。

輝羅「あぢいー…………廊下だけかよ、冷房が効いてないの」

当たり前な事を呟く俺の背後には、いつもながらの六人プラスメアナが歩いていた。

教室には一番乗りなのだろう、生憎冷房は付いていない。

輝羅「あつづー…………。いつも暑いと、頭おかしくなっちゃうな…………」

一夏「一応聞くけど、一足す一は?」

輝羅「……3……」

一夏「こりゃ重症だ…………」

暫くすると、授業開始と共にクーラーが付いた。そんでもって生き返る!ああ、人類の進化って素晴らしい。

ホームルームの時間になると、山田先生が転校生が来ているという。何でも、転校生はアイドルだという。その転校生は織斑先生の声に従つて、入つて來た。

千冬「園田、入つて來い」

入って来たのは、碧色のロングヘアをなびかせる少女だ。その少女を見た一夏、第、セシリ亞、シャル、ラウラ、そして俺は自分の目を疑つた。

魅緒「園田魅緒です。よろしくね」

適合出来たんだ…。

魅緒は一応アイドルなので、クラスの女子の中に幾らかファンはいたようだ。その中に百合臭がしたが、まあいい。

時間が過ぎて、昼食時。俺はコーヒーとから揚げ定食を頼み、魅緒はタラコスパだ。向かい合う様に席につき、身の上話等をした。

輝羅「てか、仕事はいいのか?今夏だろ?写真撮影だつたり、PV制作だつて、今頃だつたろ?」

魅緒「ふつ、甘いね。実を言つと……」

輝羅「実を言つと……?」

魅緒「特に無いんだよねー、理由!」

少しでも意外な答えを期待した俺が馬鹿だつた。

その後、俺は魅緒にメアナにクウガの姿を晒した事を話す。勿論、仇の方も。

魅緒「坊主憎れば袈裟まで憎いつて奴ね」

輝羅「とんだとばっちりだ。ただ、ここで俺の正体を知っているのは、一夏と一夏ラブの連中、生徒会長と織斑先生と山田先生とメアナ位だ。因みに、生徒会長は一年でありながら学園最強のI.S.使いだ」

魅緒「そーそー。メアナちゃんと言えば、私あの娘と同室なのよ」

輝羅「そつか。言つとくけど、あいつ日本刀集め趣味だから」

魅緒「へえ。意外と日本大好き少女なのね」

会話しながらの食事はいいものだ。

外を見ると、次第に雲行きがあやしくなり、雷が鳴っていた。嫌な予感がする。当たらぬけりや、いいんだが。

また時は進み、本日最後の授業。雨が強くなり、雷も強くなつていった。俺の思つていた嫌な予感はそれじゃ無かつた。ふと外を見ると、男が立つっていた。立つているのだが、その男は傘を差さずポツンと立つていた。それもこここの敷地内。男は両手をあげると、鳥賊の様な姿に変わる。

千冬「未確認！？」

輝羅「10号……ですよね？」

すると織斑先生は俺に耳打ちする。

千冬「生徒の避難に紛れ駆除しろ」

輝羅「了解です」

山田先生と織斑先生が未確認生命体第十号を確認し、避難命令が出された。テキパキと移動する生徒達とは別に俺は人気の無い廊下で窓を開け、飛び降りながら構えた。

輝羅「変身!」

着地と同時に、俺は紫のクウガことタイタンフォームに変身した。近くに落ちてた鉄パイプを広い、専用の剣、タイタンソードに変えて、ギイガに詰め寄る。

メ・ギイガ・ギ「久し振りだな、クウガ」

クウガ「ああ、久し振りだな。また、一発で仕留めてやるよ」

鋼の鎧を宿す紫のクウガは、ギイガの墨爆弾でも見事防ぐ事が出来る。それを利用し、俺はゆっくりと接近する。墨爆弾の発射の後に、一定時間冷却が必要だが、この豪雨のお陰で冷却しながらの連写が可能だ。

鋼の鎧と止まない墨爆弾。さて、どっちが勝つかな鳥賊野郎。

クウガ「叩き切る!..」

メ・ギイガ・ギ「小癪な!..」

俺が切るとギイガは避け、ギイガが墨爆弾を吐いても鋼の鎧でダメ

ージは軽減される。若干ダメージが微弱に蓄積される俺の方が不利だ。けれども、斬撃は当たらない。あいつも腕を上げたと言うことか？

メ・ギイガ・ギ「どうしたクウガ。以前は俺がやられてしまったが、今度はお前がやられる番だ！！」

クウガ「ほざけえ！！」

激しい雷雨の中、俺は必死にギイガに攻撃を再会するが、当たらない。
突然、俺とギイガの間に黒いI.D.が現れる。それは見間違えようもない、
暗黒の幻影だつた。

クウガ「よせメアナ！退くんだ、死ぬぞ！」

メアナ「だから何！？こいつは私の両親の敵なのよ……」

メアナはギイガにダークネス・サイズを向ける。ギイガは何が入ったのかわからない様子だつた。俺には分かる。ギイガは自分の地位を上げようと、無関係の人を殺し続けた。その中には、メアナの両親もいたはずだ。いや、いたんだ。

メアナ「行つて、ファング！」

無数に飛ぶビットは矢次にギイガに当たる。そこにダークネス・ファンタム唯一の射撃兵装の掌部ビーム砲が放たれる。ギイガはそれを何と墨爆弾で相殺する。ダメージは蓄積され、ギイガはよろめく。トドメを刺そうとメアナはダークネス・サイズを大きく振りかざした。

メアナ「これで……トドメよ……」

「これで決まった。

しかし俺は、あいつと一度戦闘した事があるからよく分かる。モチーフもだ。

鳥賊の足の様な触手がダークネス・サイズを搦め捕つた。

クウガ「下がれメアナ！コイツはEISで倒せるほどやわじやねえ！…」

メアナ「お兄ちゃんは黙つて！…コイツは私が……！」

メ・ギイガ・ギ「小癪な！」

クウガ「危ない！」

ギリギリに俺は間に合つた。ギイガとメアナの間に入ることによって、墨爆弾はダークネス・ファンтомには当たらず、俺の鋼の鎧に阻まれる。

クウガ「おりやああ！…」

俺は封印のエネルギーが刃の切つ先に溜まつたそれをギイガの胴体に突き刺す。ギイガは断末魔の叫びをあげ、爆発する。

あのあと、未確認騒ぎで授業は早めに終わつた。

食堂には俺と一夏の他に魅緒と篠にセシリ亞と鈴、そしてシャルとラウラとメアナの九人しかいない。

メアナはと言つと、敵を先に討たれた事で、俺に敵意MAXな視線を送つてゐる。

輝羅「……正直、メアナの両親を護れなかつた事は、今でも悔やんでも悔やみきれない」

メアナ「今更なんでござるか!!」

輝羅「確かに、ほんの今更だよな。俺のこの手が届かない所で、人は笑顔を失つていく。そんなのが嫌で、俺は後悔したくない。そう思つたんだけど、それはただの理想論だといつ事も……」

俺は頭をうなだれる。グロンギと戦つ度に、俺は心を擦り減らしてきた。流して欲しくない涙をみたときが一番そつだ。

メアナ「でもお兄ちゃん。憎く無いでござるか? 未確認が人殺しをしてしまう事を!」

輝羅「勿論悔しこそ、憎いや……だけどよ、駄目なんだよ……」

一夏「どうこう事だ……」

輝羅「俺は一度、憎しみで心が一杯になつた時があつたんだ。俺とそんなに歳も違わない奴らを殺しつづけたそのグロンギを相手にした時、……絶命した一体のグロンギを何回も何回も、この手で……握つた剣で刺しつづけた」

まさか、輝羅が……こんな事を言つとは考へも付かなかつた。

輝羅「俺は一度、憎しみで心が一杯になつた時があつたんだ。俺と
そんなに歳も違わない奴らを殺しつづけたそのグロングを相手にし
た時、……絶命した一体のグロングを何回も何回も、この手で……
握つた剣で刺しつづけた」

俺は、輝羅がそんなに憎しみの心で戦つた事があるので初めて知
つた。

輝羅は普段は口は少し悪いが、優しい心の持ち主だと、俺は知つて
いる。知つているからこそ、さつき輝羅が言つた事が意外で堪らな
かつた。

一夏「なつ、なあ輝羅……人間誰しも人を憎む事もあるだ
」

輝羅「爆炎の中……俺は見た。凄まじき黒の瞳の戦士が、……その
時の俺と同じ倒し方をしていたんだ」

中学生が未確認のターゲットになつていたといつて、コースは、俺も
見たことがある。その時の未確認を、輝羅が憎しみで一杯になつて
いたなんて……。

輝羅「……」

あのあと、俺は先に自室に戻り、ベッドにねつこりがつっていた。メ

アナには悪いけど、俺はそんなに強くは無いんだ。

すると、ドアをノックする音が聞こえてきた。誰が来たのか、俺は確認するために、ドアを開く。

魅緒「はうう～ん」

輝羅「お前は何処の園崎だ？」

魅緒「まあまあ。それよりも、今日が何の日か覚えてる？」

輝羅「今日か？8月の上旬に何があるんだよ」

魅緒「はあ～……輝羅つたら～。食堂行かない？」

輝羅「あ～……せうだな、そろそろ腹減つてきたし」

魅緒「なら早く早く～！」

輝羅「つおわ！」

魅緒に強制連行され食堂に着いた。何があるのか解らないのが今の所悩みである。

入つて数歩歩くと、一斉にクラッカーが鳴り放たれたカラーーテープが俺を包む。

「～～～響君、HAPPY BIRTHDAY～～～」

輝羅「…………はい？」

はっぴーばーすでー？あれ、今日つて俺の誕生日だっけ？

魅緒「誕生日おめでとう、輝羅

魅緒はそういうと、俺を特等席らしき場所に連れていく。

色々あつたけど、確か今日だったな、俺の誕生日。忘れてた……。

薰子「お誕生日おめでとう響君」

輝羅「薰先輩？！バースデーインタビューでもする気ですか？！」

薰子「それもあるけど……。君は何時からリア充なのかあ？それも幼馴染みの」

輝羅「……魅緒？」

魅緒「ごめん！詰め寄られて……つい……」

その時、「あ～～ん！狙つてたのにい～～！」とか「結構好みだつたのに……！」等と聞こえた気がした。ふと気が付くと、一夏達はいない。これを予想したのか、それとも別な場所で一夏争奪戦でもやっているのかここにはいない。

結局解放されたのは一時間後。ほほバースデーパーティーと言つぱりは、ある意味拷問に近かつた……。

自室に戻る道中、俺はある人物を見付けた。メアナだ。

輝羅「メアナ……」

そうだ。あいつは俺の事恨んでいたんだつけ。
何を思つたのか、俺に近付き、俺に話しかけた。

メアナ「お兄ちゃん……御免でござるー。」

輝羅「エッ? 何謝つてんだ?」

メアナ「私……筋違いな事言つてしまつて、本当に御免でござるー。」

「!」

頭を下げる、メアナは再度俺に謝つた。

輝羅「いいよ、別に気にするな。元はとにかく、俺が……」

メアナ「でも……でも……お兄ちゃんは、私を庇つてくれたでござる。どうしてござるか? あんなに酷い事を言つたの?」

「気にしてたんだな、本当に……。」

輝羅「……誰かが死んじまつたら、別の誰かが悲しむのは嫌なんだ。俺が死ねば魅緒が悲しみ、一夏が死ねば織斑先生や篠達も悲しむ。それでメアナが死んじまつたら、俺や篠達もお前のクラスメートの皆も悲しむんだ。そんなのは、死ぬほど嫌なんだ」

メアナ「…………お兄ちゃん……! めん……なさい……」

輝羅「うつむけめんな。メアナの父をと母を守れなくて……」

「!」

メアナ「うつ……つぐ……うええええ……!」

輝羅「泣きたい時には泣け。その時は、だれかが優しく包んでくれ
っからよ」

その後、魅緒が合流し、目を真つ赤に腫らしたメアナを連れて帰つ
た。

だが……一体誰がグロンギを復活させたんだ？

転入前の俺を執拗に追つてきた黒服の連中もそうだし……一体誰が
……。

続く

第九話 紫紺（後書き）

異世界の戦士

もう一つのフリーダム

同じ顔の男達は、戦うために叫ぶ

次回【インフィニット・空我・ストライク】

【頑張】

第十話 積極（前書き）

今回と次回はジュネッスブルーちゃんとハーバーで次回はコートピア
ちゃんとハーバーです。

始まります

第十話 頑張

俺はいつも部屋に差し込む朝日で窓枠を覚ます。それがいつもいつも今日この日まで続いていた。
えつ？何が言いたいかって？それは……

千冬く一年生専用機持ちは至急第三アリーナに集合！未確認のIJSの破壊活動を！！！

輝羅「なんつー田覚めだよ！おい！！」

そう、未確認のIJSが何故か出現し、織斑先生の指示の下俺と一夏に一夏ラバーズそしてメアナの八人。

その未確認のIJSは以前一夏と鈴が相手した機体だそうだ。
そして俺はとてもイライラしている。

輝羅「消えろオオオオオオオオオオオオ！」

俺の目の前にいる輝羅は、何故か寝起きが悪いのか、自暴自棄になり、ビームサーベルを両手に逆手に持ち、無双していた。主に武装を。

なんてこつた、俺があんなに苦戦した謎のIJSを……やつぱつこいつは怒らせると千冬姉より厄介だ。

一夏「……おかしい……こつら、以前より……弱くなつてゐる……」

鈴音「それに二の数……」

「セシリア、もう少し……」

ラウラ「私たちのスタンダードを減らす作戦だらうな。それにしても誰だ、こんな量の無人機を…」「

シャルロット「余計な事は考へない方がいいかもね」

メアナ「こんの一！」

「はああ！！」

どうする…… 皆体力も限界域だ。

輝羅「おらおらおらおらオラオラオラオラ――――――――――」

たつた一人を除いて。

にしても輝羅……あいつの体力は化け物並か?

輝羅は怒りに身を任せ、無人機を撃つて、斬つて、捩じ伏せている。そんな第三アリーナに、一つの灰色のカーテンが現れ、一つの影が飛び出る。

それはフリーダムに酷似した機体で、それを見た輝羅達は、驚愕し

た。

輝羅「俺に……」

それを装着している人物のその顔は、輝羅と…

輝羅「……似ている?」

瓜二つの少年だった。

「……フリーダム?」

輝羅のフリーダムと灰色のカーテンから現れた少年のIISはおおまかに似てはいるが、輝羅のフリーダムには無い胸にコックピットがその少年にはあった。

二人は、無人機の存在を思い出し、全砲門を開き一斉射撃を繰り出す。これぞダブルハイマットフルバースト。

無人機の駆除を終えた俺達一行は、生徒会室に居た。その場には無人機を駆除した俺達と、織斑先生、生徒会長、そして俺と瓜二つの男。

灰色のカーテンからフリーダムに似た機体で登場した人物は、俺達に名を名乗った。

ユウタ「俺の名は、小野寺ユウタ19歳彼女持ち!」

輝羅「俺は響輝羅。命の響きに輝く修羅という意味で名付けられた。」

16歳だ

ユウタ「こしても、やっぱし他人と思えないな」

輝羅「ああ。所で……何なんだ？あのフリーダムは」

ユウタ「お前のモフリーダムってんだな」

千冬「お前のいる世界でも、HISは存在するのか？」

ユウタ「ええ。というか、デバイスっていうのが主流で、俺のフリーダムは普通にHISです」

楯無「ふうむ。とすると、君も未確認生命体第4号なのかな？」

ユウタ「つひつひ……」

一夏「貴方もクウガ何ですか？同じ顔です」

ユウタ「タメ口でいいよ。でもクウガは父親で俺はアギトだ」

全『あざと…?』

あざと……何なんだそれは……。

それに、同じ顔でも、変身する戦士は違うのか？

ユウタ「つて言つと……輝羅はクウガなのか？」

輝羅「ああ。一年位前から……」

ユウタ「でも他人と思えないよな」

それからユウタは自分の身の上話を語った。

クウガに変身する父と普通の母の間に生まれ、数々の戦いを経験し、フリーダムを手に入れアギトの最強体を手に入れたという。しかも、母は天才でその血を引き継いでいるが、父の馬鹿も引き継いでいるという。つまり、頭は良いけどちょっとした馬鹿なのか？

ユウタ「で……俺帰れるまで何処に仮住まいした方がいいんだ？」

輝羅「俺の家に泊まつた方がいいぞ。丁度掃除しよっかなって」

ユウタ「よっしゃ。交渉成立」

すると、生徒会室に突然人が入つて来る。魅緒だ。

魅緒「失礼します。織斑先生、山田先生が呼んで……あれ？ 輝羅、その人誰？」

一夏「ちょっと待て魅緒。どっちが輝羅か分かるのか？」

ユウタ「お前、ヴァカか？ 着ている服が違うだろ」

確かにその通り。

俺が少し苦笑いしていると、生徒会室の窓が盛大に割れた。そこには、ザインとビランがいた。

ズ・ザイン・ダ「ゲゲルの」

メ・ビラン・ギ「始まりだ」

輝羅「ザイン、ビランー!？」

ユウタ「敵?！」

輝羅「ああ。グロンギって種族でな、自分の地位を上げる為に人を殺すゲームを行う最低最悪な存在だ」

ユウタ「へつ。じゃ、変身と行くか」

俺とユウタは並んで立ち、ベルトを出し、叫んだ。

輝羅&・ユウタ「変身ー！」

俺は赤のクウガに変身し、ユウタはクウガに似た戦士に変身した。

ズ・ザイン・ダ「へつ、クウガが……」

メ・ビラン・ギ「一人だと……」

クウガ「確かにそつくりだなユウタ。何て言つんだ、その戦士は」

アギトG「アギト……って言つんだ。言つとくけど、モチーフは西洋の龍だからな」

クウガ「へつちはクワガタだよ」

クウガとアギトは猛進するズ・ザイン・ダとトリッキーな攻撃を上手く避けきり、細かな攻撃を繰り出す。

アギトがビランの攻撃を避けるとそのビランの背中にクウガが墜落しを繰り出し、クウガがザインの突進を受け流すとアギトがザインの足を払った。

グロッキー状態のビランとザインに向け、クウガとアギトは必殺の構えを取つた。

クウガ「ＫＯＯー」（誤字：ぢやありません）に行くぜ

アギト「行くぜアミー、ゴー。」

クウガは数歩下がり、アギトは足元で自身のライダーマークを浮かばせクロスホールを開く。クウガが走り出し、並んだ瞬間二人は高くジャンプ。クウガは空中で一回転し右足を、アギトは左足を繰り出しダブルライダー・キックをザインとビランに繰り出す。

ザインとビランを倒した俺とユウタは変身を解いた。解いたら解いたで、俺達は腹が減った。そういうえば、飯まだだつたな。

ユウタ「あー、腹減った」

輝羅「そういうや俺もだ。今朝から何も食つてないからな

楯無「いよいよ今から食堂で大宴会やるよー！」

千冬「……呆れて物が言えん」

織斑先生はそう咳き、頭を抱えていた。まあ、確かにそうなんですね？生徒会長ですから。

その後食堂では、どんちゃん騒ぎとなつたのだった。

I.S学園の校舎屋上。そこに灰色のカーテンが現れ、中から一人の男女が姿を現した。

男は筋肉質な体型をしており、女は筈に負けず劣らずの体型をしていた。そしてどちらも、I.S学園の制服に身を包んでいた。

「I.S学園……だが何か違う」

「本当に何かが違う……」

続く

第十話 頑張（後書き）

次回

新たに現れるI.S使い

それは異世界の来訪者だった

黒き牙と永遠の月が空を彩り、その姿をさうす

次回【インフィニット・空我・ストラトス】
【牙月】

第十一話 狂想（前書き）

今回でAUGUSTちゃんとパートナーさんとのパラボは終了です。ありがとうございました!

第十一話 牙月

ユウタが現れた今日。無人機が出て来たり、ザインとビランが復活したりで、俺響輝羅は彼女である園田魅緒とその他の愉快な仲間達に慰め励まされ生きている。

ただ、俺の目の前には、またもユウタと同じく異世界から来た男女が居たのだった。

ただこれだけは言わせてくれ。

輝羅「気楽なドリーマー 気ままなドリーマー」

メアナ「お兄ちゃんが壊れたでー」

俺は疲れが貯まりすぎた時にそつ発するのだ。またも生徒会室にいる俺達の目の前には銀髪で赤い瞳をした筋肉質の男とオレンジの髪に簪に負けず劣らずの良い体型をした女が居る。名は男の方は黒谷終、女の方は音梨楓と言つ。彼等は俺にこう話した。

終「俺達の世界はお前達の……この世界のエラのコアよりも一つ多い

セシリ亞「何ですか？」

楓「それに……」かの世界では、輝羅さんとメアナさんそして魅緒さんは存在していないんですね

輝羅「また異世界騒動かよ。ツテコトは、そつちこもー夏達は居るんだな」

終「まあ そうだな。一夏は幕と恋仲だし、鈴にセシリヤにシャルにラウラは楓にべつたり百合百合だ」

ISのコアよりも、俺はそっちの意味で驚いた。流石の一夏達はと
いうと、一夏と篠は顔を見合わせる事は出来ない位で、それ以外の
四人は、ポカーンと口を開けて何か分からぬが、白い塊を出して
いた。

輝羅「よかつたなー、そつちの一夏と籌。……ただ」

「ただ? ただどうしたんだ?」

「ウタ「多分……萌えだな。絶対発動するぞ」

ユウタの言つ通り、俺の中の固有結界が発動した。

輝羅百合！それは、萌えの極意の一つにして、高嶺の花と等しい程だ！可愛い女の子同士の絡みは正に絶品であります！甘く甘く、芋羊羹よりも甘く、チョコレートよりも甘い空間が俺達萌え信者達には感じられる！更に、半裸での絡みは正に極楽以上の極意！つていうか簡単に言えば、女がBLモノ見るのと同じだひやつはー！しかも、魅緒程でも無いが、楓見たく【可愛らしい + ええ体してまんな】効果により、フツーの女子でも美が溢れる！溢れる！更に更に

魅緒「うん。いつもの輝羅だ」

「いや、おかしいだろ」

ユウタ「それがあいつだ。あいつは、自分の信じる物（萌え道）に正直な男だ」

楓「というか、輝羅さんは一体何を言っているんですか？」

終「知らない方がいい」

暫く、馬鹿やつている俺だつたがまたもIISによる襲撃を受けた。何かと思い、外に出て確認するとそこには、無人機IISを従えたメ・ギヤリド・ギだつた。しかも、ギヤリドは何故かIISを装備していた。

輝羅「輝け、フリーダム！！」

俺は誰よりも先にフリーダムを装着。フリーダム特有のスピードでギヤリドにビームライフルを向けながら、寸前で止まった。

輝羅「お前……死んだ筈じや……なかつたのか？」

メ・ギヤリド・ギ「久し振りだなクウガ。このリントの鎧はある組織が我々グロンギに託した物だ。俺の鎧の名は兔^{トラック}門口」

輝羅「組織……それって、黒服の……」

メ・ギヤリド・ギ「正解。では賞品として、その命……貰い受ける

！――」

俺に迫るギヤリド。その腕にはヤドカリ怪人なのか、ヤドの様な槍を俺に向けて迫つた。

しかし、それは黒いIISによって防がれた。それも装着者は終だ。

終「大丈夫か、輝羅！」

輝羅「それが……終の専用機？」

終「ああ。468個目の「ア」を使った「S……黒き牙だ！」ブラックファン^{ブラックファン}グを纏つた終と俺を見たギャリドは、獲物を得た獣の様に笑い、槍を構え迫つて来る。

メ・ギャリド・ギ「かあぐ」おおおおおお……」

俺はツインビームランスを構え、終はハーデスという武器を構えて迎え撃つよにギャリドに叫んだ。

輝羅「んなもんとつぐに出来てんだよ……」

終「喰らいやがれ……」

ユウタを筆頭に一夏、篝、セシリ亞、鈴音、シャルロット、ラウラ、メアナ、そして楓が戦闘体制に入るが如く、専用機を纏つた。

ユウタのフリーダムのバラエーナとセシリ亞のブルー・ティアーズのスター・ライト^{mk3}の火線が無人機を打ち抜き、一夏の白式と篝の紅椿と鈴音の凰龍がすれ違ひ様に無人機を切り裂く。

シャルロットとラウラがラファール・リヴィア・イブ・カスタムとシュバルツェア・レーゲンを装着し、楓も自分の専用機を纏う。楓の専用機、名は^{エターナルムーン}永遠の月。それが彼女の専用機にして、469番目の「ア」を使用した機体。

楓「行きます！」

三叉槍・ポセイドンを構えた楓は、シャルロットとラウラに続くかの様に、無人機を刺し貫く。

シャルロッテ、やるねえ、権力

楓 あ、はいシャルさん

ラウラ「無駄口叩くな。輝羅と終が頭を落とさない限り、こちらが不利になる！」

一夏一行くぜ！ 篠サポート頼む！ 級爛舞踏、期待してるぜ！』

第三章 あ、……ああ。思つ存分やつて来い！」

何故か少しだけ人の距離は縮んでいた。

エネルギーを与える。それが繰り返されて行った。

終「はああああああ！」

ギヤリードに猛進する俺と終はイグニッショングーストを行なながらギヤリードの鬼蠶門口のシールドエネルギーではなく、アーマーフレ

ームだけを削いでいく。

俺のやることが分かつていいのか、終は簡単にギャリドのシールドエネルギーを削がなかつた。

ギャリド「……何を……する気だ?」

輝羅「こつする気だ!」

俺のフリーダムの五つの砲門が開き、終のブラックファンジングも同じく必殺技の構えに入つた。その終の技は、何処か零落白夜に似ていた。

輝羅「ハイマットフルバースト! ! !

終「ファンジングクラッシュヤー! ! !

この二つの技が決まり、ギャリドは死滅。IS・兔蟲門口もコアだけを残し、塵と化した。

ユウタ「大丈夫か、みんな!」

楓「だい……じょうぶ、です…」

そういう楓だが、数が多いせいか、疲労が溜まつていた。ふと、彼のもう一つの人格が彼女自身に語りかけた。

(ふふふ。頑張ってるわね、楓)

楓（…………！？…………楓？）

楓（…………私の力を貸してあげる。だつて、貴女の傷付く姿は見た
くも無いの）

楓（…………うん。お願ひ。行くよ、楓）

すると、楓のエターナルムーンはその姿を変えると同時に、楓自身の右目が赤、左目がコバルトブルーに変わりオッドアイになつていった。

これが、楓と楓のもう一つの人格である楓の意志が一つになつた双ツイン月の降臨だ。

あのあと、無人機を一掃した俺達の前にユウタと終、そして楓を迎えるように灰色のカーテンが現れた。それは楓が奥の手を使用し、氣を失つて目覚めた後にだ。

たつた一日、だつたけど、深い絆が、俺とユウタと終には表れていた。どこぞの「宇宙キター！」なヤンキー高校生の様な友情を示す握手をし、ユウタはユウタの世界、終と楓は終と楓の世界へ帰つて行つた。

ユウタ「さよーならー！」

終「またな」

楓「皆さん、今日はお世話になりました！」

三人は灰色のカーテンに包まれると同時に、灰色のカーテンは消え去った。残つたのは俺と魅緒と一夏と一夏ラバーズとメアナと織斑先生と会長だけだった。

ふと、俺はとある事に気が付いた。

輝羅「 そういえば、そろそろお祭りあつたな。行くか」

篠ノ之神社のお祭りまで、後三日。

その間に、一夏と篠の間が縮まれば良いんだけどな。

続く

第十一話 牙月（後書き）

次回

夏のお祭り…

轟く花火の轟音…

そして、少年と少女は何を見る…

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【御祭】

なんか、ラスト適当ですみませんでした！
そして、AGITさんとコートピアさん、これで宜しかったでしょうか？

第十一話 御祭（前書き）

遅くなりました！

冬だと雪の上、話の舞が夏

執筆が遅れて…すみませんでした。

実家で朝を迎えた、俺響輝羅は窓を全開にし朝日を浴びた。やつぱり夏なので、暑い。ほんとに暑い。

輝羅「だーつ！清々しい朝が台なしだ……」

仕方ないけど、とつとと朝飯食つか。

さつさと私服に着替えた俺は階段を降りる。

因みに、基本俺はインドア派だ。何故ならば、ISがこの世に現れて、男尊女卑の時代から女尊男卑の時代に覆つてしまいそれにより法律も増えに増えた。その法律の一つに『女性は見ず知らずの男性にも荷物を持たせる権利の所有を認める』と『男性が上記の法律を違法した場合何らかの罰金と罰則が下される』という様な法律があり、圧倒的に女性が有利になってしまった。

そんな訳で、一度街に出れば誰かも分からん女性から無理矢理荷物持ちにされるので、俺は食事の買い物以外滅多に外に出ない。しかし、お祭りとなると別だ。昔氣質のお祭り男がまだいる いい例が五反田食堂の常連の漢達おじい 時代だ。何もそこまでその法律が強要される訳でも無いだろきっと。

そんなこんなで、納豆ご飯と卵だけの朝食を食べながら、ニュースを見た。今の所グロンギの動きも無いようだな。

輝羅「夕飯は、お祭りの出店のヤキソバ位にしつくか」

そう言い、俺は納豆を搔き混ぜてから卵を割り、黄身と白身と納豆を良く搔き混ぜ、炊きたての白いご飯の上に載せた。おかずはアサリのみそ汁を初め、卵焼きと焼鮭とお新香そして五反田食堂からおそ分けで頂いたカボチャの煮付け。

輝羅「にしても、平和だなあ……」

「お兄ちやん醤油とつてで、じやるわ」

「輝羅、お新香取つて」

輝羅「ほい醤油。ほいおし……ん！？」

あれ？何か可笑しいぞ。俺今一人暮らしだよな、何で、何で……

輝羅「どつから入つたんだ？メアナと魅緒」

メアナ「納豆はやつぱり駄目で」ざわるわ……

魅緒「おいしーよ、特にキュウリ」

輝羅「答える気は無いんだな、そりなんだな」

何でメアナと魅緒が俺の家で朝飯頂戴してんのかね？かたや力ナダの代表候補生かたや人気絶頂のアイドルの一人が……朝飯困るほどの要因は無いと思うのだが。

まあ、既に諦めるという事を身につけた俺は、もうどうでもよくなつてきた。

食後、俺は一人に何故ん家で朝飯を頂戴しているのか、理由を聞いた。

魅緒「そりやあ、篠ノ之神社のお祭りに行くんだもの」

メアナ「日本のオマツリを見たかつたもので

輝羅「成る程なあ……もつ突つ込む氣にもなれん。それにメアナ、お祭りは夕方辺りから始まるんだ」

メアナ「そうなんで御座るか?」

輝羅「まあ、昔つかりそつなんだ。それまでに、何したい?」

メアナ「そーでいざるなー……ウーン……」

輝羅「魅緒は?」

魅緒「そうね、浴衣持つて来てるし、着替えて待つわ。部屋、借りるね」

メアナ「私も私もーでいざるー.」

結果的には魅緒とメアナは使ってない部屋を貸し、俺は扇風機に当たりながら読みかけのライトノベルを読む。

既に三冊のライトノベルを読み終えた時には、日は真上に上がっていた。

思えば一人の浴衣姿を先程まで何度も想像したことか。

輝羅「(んな馬鹿な。俺がリアルに口リに田覚めたのか?しかも三回元……いやいや、考え過ぎだ。何も考えない方がいいそれがいい)さてと、そろそろ昼飯作るか?」

浴衣姿で食べられる物は限られている。だが、今日の昼飯は麺類が食いたい俺。素麺や冷や麦が食いたいけれども麺類はつゆに浸ける物はアウト。だが麺類全般駄目とは限らない。ヤキソバと焼きうどんが作れる。材料もある。よし、あいつらに聞いてみつか。

輝羅「魅緒ー、そろそろ昼飯だけど、ヤキソバと焼きうどんどっち食いたい?」

襖の奥から魅緒とメアナの声が小さく聞こえた後、魅緒の声で焼きうどんが食べたいと言つてきた。

着付けつてそんなにかかるのかね?ま、いつか。

輝羅「……具になりそつなのあつたつけ?」

探していくと、海老にピーマンに九条ネギに人参が見付かった。そついえば、メアナも魅緒も好き嫌い無かつたし、よしこれでいくか。

それから数時間後、篠ノ之神社に到着すると黒山の人だかりとも言うべきか、それ程人が集まっていた。むしろ殆ど浴衣の人が多くつたな、うん。

着てからといふものの、メアナが金魚すくいによーよー釣りと俺だけにねだる。おこちよつと待て、俺いまんとこ懐事情やばいんだよー。

メアナ「懐事情なんて気にしないでいざる」

輝羅「おまつ、人の心の中を見るな読むな！魅緒からも何とか言ってくれよ。」

魅緒「ごめん！寮の金庫にしまったまんまだったわ

輝羅「嘘だろ、おい」

しばらく歩いたどうか。俺達三人は浴衣姿の簫と私服の一夏と落ち合つた。

一夏と簫は俺達に驚いた様だが、俺らは全く気にしない。それに、少しでもおちよくなつたら、俺の明日と守られる笑顔は無いだろ。

メアナ「お姉ちゃん、お兄ちゃんの財布が毎度可哀相でござる。」

輝羅「お前が潰してんだろうが……つと、一夏

一夏「何だ？」

輝羅「久々に射的勝負すつか？今回はでつかい獲物を仕留めた方が勝ちつて事でよ」

一夏「乗つた！」

一夏は俺の挑戦を一つ返事で返した。
射的屋に向かうと、途中で蘭と合流する。

輝羅「あ、蘭か」

蘭「あ、響さん一夏さん」んばんは……

魅緒「蘭ちゃんおひわー！」

蘭「魅緒さん！？お久しぶりです。お仕事お疲れ様です」

魅緒「大変よ、アイドルも。まあ、慣れれば問題無いわ」

少し雑談しながら進み、ようやく目的の射的屋に着いた。

ゲームは先攻後攻で行う。「インストの結果俺が表で後攻。一夏が裏で先攻という形になった。

俺は敢えて小物を狙う。ここで大物を狙つて弾を無くすより効果的だ。緑のクウガで鍛えた射撃能力舐めんなよ？誰に言つまでもないけど。

メアナ「……小物ばかりでセコいで」やる

魅緒「駄目だよメアナ。輝羅は小物しか狙わないチキン・ザ・ハードって気にしてるんだから」

輝羅「あんたら揃いも揃つて何を言つてるのかな！？」

結果、小物ばかりであつたが、全弾命中。だが、やはり俺は大物は狙えなかつた。

一夏のターンにならうとしたその時、俺のケータイに通話が入つた。相手はあの小岩さんだった。

輝羅「あー、魅緒スマン。小岩さんから電話来てつから皆とお祭り楽しんでてくれ」

魅緒「……もしかして、グロングギ？」

輝羅「まだわからないが、取り合えず電話出とかないとな」

俺はケータイを取り出し、電話に出た。

輝羅「響です」

小岩く響さん、出番です。25号が復活してしまいました>

輝羅「！？奴は…今何処に？」

小岩く詳しい場所は車で迎えに来ます。場所を教えてくれませんか
？>

輝羅「篠ノ之神社です」

小岩くでは近くの交番に来てくれませんか？私もそこに行きます>

輝羅「はい！」

街中を有り得ない程の重さを誇る鉄球を振り回す人外の存在は次々に罪の無い人間を殴打し圧殺し撲殺していく。

人外の名はメ・ガドラ・ダ。別名未確認生命体第二十五号。

今回の彼のゲゲルのルール。それは自転車に乗る人間の男の殺害。後五人。達成すれば彼は晴れてゴ集団の仲間入りを果たす。しかしそれを阻止するものがいた。

クウガM「バルバル」

「

突如現れた赤い人がガドラの顔を出会い頭に殴り飛ばす。その者こそがリントの戦士・クウガなのだ。

メ・ガドラ・ダ「久しぶりだな。クウガ！」

クウガM「俺はお前に一度と会いたく無かつたけどな」

メ・ガドラ・ダ「それでは覚悟しろ！一度とはい上がるがれぬ様にしてくれるわ！」

さあて。ガドラは非常に厄介だ。だつたら俺はどうでるべきか、思考を巡らせる。

以前俺はガドラとの戦闘の際は、赤のクウガで戦つた、そして倒した。だが奴は今こうして復活して俺と戦つている。今度は、色変え祭といきますか。

奴が鉄球を振るうと、俺はそれをバックステップで避け、近くの竹箒を手に振るい、青のクウガに超変身する。

クウガM「超変身！」

赤から青の鎧に変わり、瞳も赤から青に変わる。ショルダーアーマーの強度は少し失せてしまったが、自慢の跳躍力がこの青のクウガの自慢だ。

持っていた竹箒は青のクウガの専用武器へと変わる。俺命名龍の杖だ。

メ・ガドラ・ダ「青くなつたか。だが変わつたところで何も変わら

ん！死ねえ！」

クウガD「変わるんだなあ、これが」

跳躍力が向上することで素早い動きが可能となつた俺は龍の杖を振り、徐々にガドラにダメージを負わせる。

続けて距離を取つた俺はゴミ置場にあつた割れた水鉄砲を手に取り、緑のクウガに超変身する。

クウガD「超変身！」

ショルダー・アーマーは左肩だけになり、青かつた鎧と瞳は緑に変色。更に持つていた物も緑のクウガ専用武器に変わる。名付けて、天馬の弓銃。

ただし、緑のクウガの使用時間は異様に短い。なので俺は数発乱射し…

クウガP「超変身！」

紫のクウガへと超変身する。先程持つていた竹箒を広い、紫のクウガ専用武器の剣に変化。俺命名大地の剣。

クウガT「覚悟はいいか？今の俺の防御力は伊達じゃねえぜ」

ガドラの鉄球が俺を何度も殴打するが、固い鎧にひびさえ入つてはなかつた。ただゴ集団相手だとひび入るけどな。

しばらくは剣と鉄球のぶつかり合いだつた。ぶつかり合いと言つても、来る鉄球を剣でたたき落とすだけである。それだけでも俺は良かつた。何せガドラのスタミナを切らす事に成功したからだ。

赤のクウガに戻つた俺は、数歩下がり、肩で息をしているガドラに

だ。
向け助走をつけ、必殺技を打ちました。赤のクウガの必殺キック

メ・ガ・ド・ラ・ダ・イ・く・あ・あ・フ・！・ト

メアナは既に寮に帰つてしまつた。目的は今夜再放送する時代劇が見逃せないからだという。

魅御

彼女は人を待つていた。たった一人で。その人は魅御にとつて大切な人で、アイドルとしてでなくただ一人の女の子として自分を好きになつてくれた。その人は自分の趣味には正直で、臆せず生き生きとしていた。その人は誰かの流す涙は見たくない、皆には笑顔でいて欲しいと小さい頃から現在まで願つていた。その人はとても臆病だつた。

やがて周囲に人気は消え、ついには一人ぼっちになってしまった。ケータイの電子時計を見ると、8時手前になっていた。

魅御「……遅いなあ……」

ふと、彼女の脳裏に過去の思い出が沸き上がってきた。それは何年

前だつたか、クリスマスの時だつた。

それは今から何年前だつたか。幼稚園に転入仕立ての魅御は今と違つて、周囲と馴染めずにただ一人でウジウジとしていた。それが恰好の餌となつて、虐めの対象となつてしまつた。ただ一人、そんな彼女を味方となつてくれたのが、その人だ。

『おまえらやめろよな！かっこわるいぞ！』

幼少期のその人は勇氣があつた。その人とその人の友人の一夏も自分を庇つてくれた。

『おれのなまえは、ひびききらーいのちのひびきにかがやくしゅらつてかくつてとうさんがいつてた。きみは？』

思えばその人……輝羅の独特的の自己紹介は、その時からだつた。当時の魅御はその意味を知らず、当時の輝羅も意味を知らなかつただろう。

とにかく彼は笑顔をとにかく好いていた。

その時から、魅御は変わりだした。突然過ぎたのか、周囲も、一夏も、そして輝羅さえも驚いていた。

今思えば、その時から魅御は輝羅を好きになつていた。

次の思い出は、中学に入りたての頃だ。

親しかつた篠以外にも鈴という友人ができた魅御。同時にこの頃からアイドルを目指していたのは間違いない。

輝羅も後押しするように応援してくれた。その時の笑顔とサムズアップが今でも克明に思い出せる。

最後は中学三年の頃だ。

この頃には輝羅はクウガの力を手に入れ、魅御は見事に「アイドルになり活動が始まった。

この時にはお互い意識していた事は確かだ。

鈴が別の中学へ転校する以前には既に二人は付き合っていた。卒業式の日、戦いを終えた輝羅とこの日オフが貰えた魅御は卒業証書を入れた筒を脇に抱え、桜の樹の下で並んで座っていた。

『……こんな時代だけどさ』

『……んう？』

『俺、皆の笑顔……守れたかな？』

『……護れたよ』

『……え？』

その時魅御は輝羅の腕に抱き着いて、言った。

『……にいるじゃない。私は貴方に救われた。貴方が守った笑顔第一号だよ』

『……？』

この時輝羅は幼稚園時代の事を良く覚えていない。だけど魅御はた

だ輝羅といえば良かつた。

例え、進学先の高校が違えども、お互に心の中で通じ合つていると
魅御は信じていた。

魅御「…………届いてるかな……」

顔を伏せているその時だ。足音が聞こえてきた。前方からゆっくり
と歩む人物がいた。

魅御は顔を上げると、そこには待ちに待つ魅御を救つてくれた男
がいた。

輝羅「あー…………つと…………遅れて……ゴメン」

愛想笑いを浮かべながら右手で後頭部を擦る輝羅は会口一番、謝罪
が魅御へと送られた。

すると魅御は立ち上がるとい、輝羅に向かつて指を指し、命令口調で
言った。

魅御「輝羅伍長！私を伍長の実家まで負ぶさりなさい！」

輝羅「俺伍長かよ！」

魅御「少佐命令であるー！」

輝羅「…………はあ。了解致しました！少佐殿！」

ため息をついた輝羅は精一杯の返事を魅御へと送り、命令を忠実に

執行する。

夜空には満点の……とまではいかないが、いくらか星が見えていた。

輝羅「…………あがベガにアルタイルにアルタイルって奴だな」

魅御「え？ 見えないよ」

輝羅「ほら、あの三角」

その後彼等二人は、輝羅の実家に着くまで星の観察をしていた。

続く

第十一話 御祭（後書き）

次回

ギノガの猛毒

値に伏す輝羅クウガ

それはフリーダムに影響が……

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【墮空】

輝羅「めえん！！」

一夏「なんの！」

俺と一夏は今、剣道部の助つ人として練習に参加していた。因みに、俺の相手はクラスの女子Aに対し、一夏の相手は笄だつた。勝敗はもう分かるだろうけど、俺圧勝、一夏ボロ負けだつた。

輝羅「おいおい、一夏。腕、廢つてんじやねえのか？」

一夏「受験勉強で……」

輝羅「理由にならねえよ。俺は……まあ……紫のクウガの剣術練習に役立つし！」

周囲に漏れない程度の小声で会話する俺達が解放されたのは、それから2時間後だつた。

俺達が何故助つ人をやるようになつたのか。それは何を隠そう、生徒会長の意図だからだ。一夏はお試し期間だから各部活動一回しか助つ人で使用出来ず、逆に俺は本格的に助つ人として使われている。寮の部屋に戻ると同時に、俺のケータイに小岩さんから連絡が入つた。

小岩「響さん、未確認です！」

輝羅「何ですって？！何号ですか？」

小岩く第一十六号…です^

つてこたあ、ギノガか。

取り合えず俺は返事をして、すぐに小岩わんが指定した場所まで移動する。

俺は一夏に一言残しておく。

輝羅「未確認が出た。行つてくる」

一夏「ああ。… そつだ、これだけは聞いておきたい」

輝羅「何だ？」

一夏「もしあ前が死んだら…… 魅緒になんて言えば良いんだ？」

輝羅「そつだなあ。…… 俺は帰つてくる…… とだけでも言つといてくれ

そう遺言めいた

死ぬ氣なんてさらさら無いが

事を言つ

た俺は直ぐさま向かつた。

確か、メ・ギノガ・デつていやあ……

白い髪を長く伸ばしたオカマは、ビルの影で男の脣に自身の唇を重ねた。男はしばしア然としたが、突如苦しみだし、もがき、ついには倒れ、絶命した。

オカマ?「……あと……8人…」

オカマは姿を変え、未確認生命体第二十六号であるメ・ギノガ・デになると同時に横から衝撃が走った。クウガだ。

クウガM「だああああ！－！」

メ・ギノガ・デ「クウガ！？」

自身の敵を見付けたギノガは、臨戦体勢を取った。そして思った。自分の毒でやられるがいいと。

クウガM「いい加減にしろ！お前は……お前達は、そんなに位を上げたいのか？何で…何で殺す必要があるんだ！」

メ・ギノガ・デ「ああ。上げたいよ」

今更な疑問をギノガにぶつけた俺はギノガから返答が来ると同時に拳の応酬を食らわす。ギノガは流して避けるが、ギノガのドテつ腹にミドルキックが当たる。

ギノガは攻撃力こそは低いが、厄介なのは奴のモチーフともなっているキノコによる毒胞子。だが、それは奴の口から吐かれるものであるので、奴に捕まらなければ問題はない。

それから俺は、キック、アッパー、回し蹴りのコンボを繰り返す。反撃とばかりか、奴は俺目掛け抱き着こうと襲い掛かる。

クウガM「怪人に抱き着かれるなら男に抱き着かれる方がまだマシだつての」

内心毒づく俺だが、攻撃の繰り返しでスタミナが減っていく。逆にギノガはピンピンしてやがらあ。

もう何度も奴にパンチやキックを浴びせたが、覚えてはいない。必殺技を受けさせようにも、奴は一行に弱まらない。

突然。俺の背後で、母親とはぐれたのだろう、幼稚園児ぐらいの子供がそこにいた。

クウガM「逃げろ！逃げるんだ！」

「よつ、四号！？」

クウガM「早く！！」

子供に気を取られた俺は、誰かに両肩を捕まれた。それが誰かはすぐわかった。ギノガだ。強制的に俺を振り向かせ、俺の口へ直接毒を吐いた。

未確認生命体第二十六号。メ・ギノガ・デは、自分の体で生成した毒を未確認生命体第四号ことクウガはギノガの毒に侵されていた。既に立ち上がる事も出来ず、痙攣を起こし、ついには変身が解け、元の響輝羅の姿に戻った。

それから、警察である小岩が駆け付け、ギノガは小岩には目もくれず、その場を去つた。

小岩さんに連れて来られた、俺織斑一夏と篠達、そしてメアナに魅緒はある病院の奥深い部屋へと通された。

そこには、俺と同じ位の大きさの物が横になつて上から下まで白い布が被された。

千冬姉が小岩さんに許可を得て、白い布の一部分を取つた。そしてその下には……

魅緒「嘘……でしょ……」

俺達が見慣れた顔で、さつきまで生きていた……

魅緒「……輝羅……」

俺の親友の響輝羅だつた。

メアナ「お兄ちゃん……お、こい……ちゃん……」

魅緒とメアナは嗚咽を漏らし、篠達も友人を亡くしてか涙を流していた。そして気付けば俺も涙を流していた。

一番身近だった存在が、今こうして死んでいる。

小岩「申し訳ありません……十六号に……十六号の……毒に……」

警視庁の小岩さんが、俺達に向かつて土下座で謝罪した。しかし魅緒は、殺氣立つた表情で小岩さんの胸倉を掴み、無理矢理立たせて怒鳴つた。

魅緒「返して……返してよ……輝羅を……輝羅を返してよ……！」

千冬「園田！」

幕「待て、魅緒！落ち着け！」

千冬姉と幕が魅緒を抑えつけ、小岩さんは身なりを直して今回の未確認についての事を教えてくれた。

まず「二十六号のターゲットはいずれも男であることと、歳が高校生以降ということ。そして、どの人も黒髪だという事だった。これには小岩さんも入ってしまう。

小岩「響さんは、ターゲットに私も入ってしまうという事で、退いてくれときました。あの時、私は無理でも……無理にでも……」

…

小岩さんは悔しそうに地面を何度も何度も拳で叩いていた。
輝羅の性格上、無駄な犠牲を出さない、誰かの流す涙を見たくない、
そして何より笑顔を守る。俺が知っているのはこのくらいだ。

あいつはよくよく無茶をする。たまに暴れる事もあるが、それでも笑顔を護りたいと言っていた。

それが今、それが断たれてしまった。

寮に戻った俺達は、取り合えず二十六号についての対策を練った。
厄介なのは二十六号は毒殺という手法で人を殺し続ける事。そのやり方は人間体怪人体関係なく、口移しで殺害するという。
即効性の様で、クウガに変身した輝羅もそのように……
二十六号については、ラウラの黒ウサギ隊の衛星でキャッチ出来て

いる。

一夏「作戦はこうだ。まず、囮が一十六号をアリーナへと誘い込む。アリーナまでは二三人程護衛が必要だ。誘い込んだらアリーナでエスで撃つ……といつ作戦だが……」

駄目だ。とにかく駄目だ。
何考へてるんだ俺。

千冬「……その作戦、上手く行くとも考へていいのか？」

終いには千冬姉にもシッコリを……あれ？

一夏「ちふ……じゃなかつた。織斑先……生？」

千冬「響の弔い合戦……良いだろ？許可する」

六人『はい？！』

あつたりと言つていいのか千冬姉。でもこれで、心おきなく輝羅の敵が撃てる。

千冬「ではこれより、織斑の出した貧弱な作戦を本に新たな作戦を下す。それと、この作戦が終つたら全員反省文を提出するよ！」

とある病室。そこには横たわった輝羅がベッドの上で安らかな表情をしていた。彼は生き絶える寸前に三度ほど電気ショックを浴びた。その影響だからか、彼の死体の周りを稻妻が走り、右腕のフリーダ

ムとベルト…アーフルにも影響していた。

しかし、それを知るものは、監視カメラを覗く者以外は誰も見ていなかつた。

頭に機械的なウサギの耳を付けた人物を除いて。

続く

第十二話 塵空（後書き）

次回

誘い込まれた未確認生命体第一一十六号

窮地に追い込まれる一夏達

そして、あの男が蘇る

次回【インフィニット・空我・ストラトス】

【復活】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0938t/>

インフィニット・空我・ストラトス

2012年1月8日22時45分発行